奈良市埋蔵文化財発掘調査の歩み

Ⅰ

－速報展示リーフレット集－

（平成11～14年度）

2005

奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財発掘調査の歩み

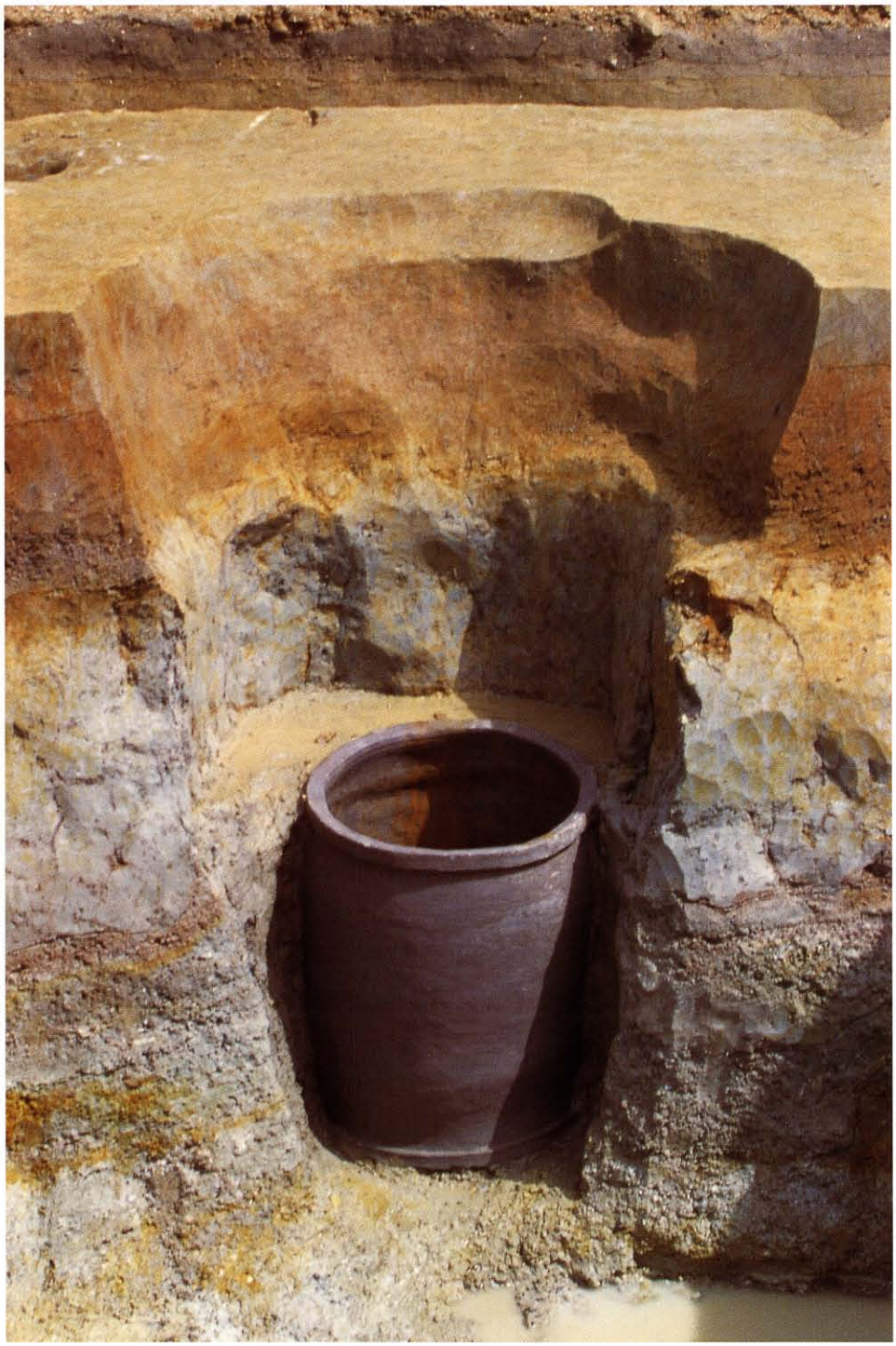
Ⅰ

－速報展示リーフレット集－

（平成11～14年度）

2005

奈良市教育委員会



口絵1　陶製（須恵質）の井戸側（枠）出土状況

口絵2　神功開寶の鋳放し銭と鋳型

平城京跡出土　3頁

口絵3　鋳造関連遺物（坩堝、鞴羽口、炉壁、銅滓、木炭、鋳棹、ほか）

平城京跡出土　3頁

口絵4　井戸に利用された須恵器大甕

平城京跡出土　13頁

口絵5　南大門の基壇外装

大安寺旧境内　17頁

口絵6　人形木製品

平城京跡出土　9頁

口絵7　束になって出土した木製人形

平城京跡出土　11頁

口絵8　「伊勢竹河」と書かれた木製人形

平城京跡出土　11頁

口絵9　磚仏

平城京跡出土　15頁

口絵10　磚仏

平城京跡出土　15頁

口絵11　塑像（右−等身大立像の腕部、左−邪鬼の頭髪部）

大安寺旧境内出土　19頁

例　言

1　本書は、平成11年度から平成14年度にかけて、奈良市埋蔵文化財調査センターで実施した、速報展示の際に一般向に作成したリーフレットを集成したものである。

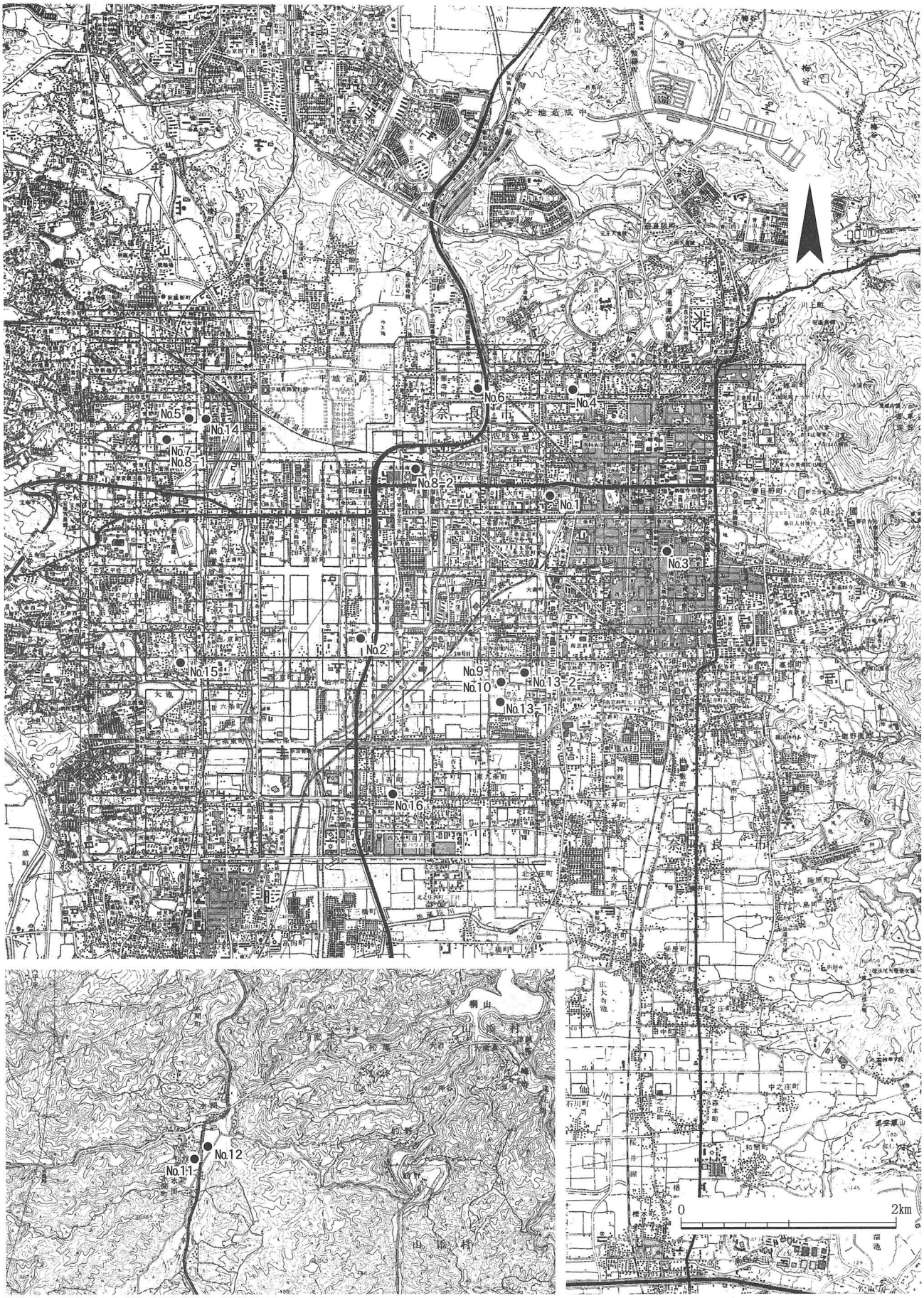
2　展示及びリーフレットの作製は、平成14年度を秋山成人、その他を森下浩行が担当した。展示の内容、及びリーフレットの内容については、下表の通りである。

3　リーフレットは、表裏（２頁）で構成し、表には主に発掘調査の概要を、裏には特記事項について記載した。

4　本書を作成するにあたり、展示した遺物、パネルの写真を巻頭に掲載した。また、年度によって異なっていた組みと版面を統一した。このため、挿図には、新たに作成、変更、削除したものがある。集成にあたって、用語、文体の統一は、行なわなかった。

5　本書の編集は、森下浩行が担当した。

年　度	回　数 会　期	遺跡名（所在地）	リーフレット			
			No	題　　名	面	執筆者
平成11年度 (1999)	第１回 10.1～10.15	平城京跡　左京（外京）三条五坊三坪 （大宮町一丁目）	No1	陶製（須恵質）の井戸枠	表	武田　和哉
					裏	三好　美穂
		平城京跡　左京六条一坊十六坪（柏木町）	No2	神功開寶の鋳型と鋳造関連遺物	表 裏	原田　香織
		奈良町遺跡（北室町）	No3	中世末の金貨（蛭藻金）	表 裏	中島　和彦
平成12年度 (2000)	第２回 5.22～6.16	ヤイ古墳（法蓮町）	No4	古墳時代後期の前方後円墳と埴輪の祭り	表	原田憲二郎
					裏	森下　浩行
		平城京跡　右京二条三坊二坪（青野町）	No5	まじない!?　祈り!?　新発見の人形木製品	表 裏	松浦五輪美
	第３回 11.1～11.30	平城京跡　左京一条三坊十三坪（法華寺町）	No6	京内最大の井戸と中から出てきた大量の人形	表 裏	松浦五輪美
平成13年度 (2001)	第４回 6.18～7.31	平城京跡　右京二条三坊十一坪（青野町）	No7	須恵器の大甕を再利用した井戸	表 裏	中島　和彦
		平城京跡（菅原町、二条大路南一丁目）	No8	平城京跡から出土した磚仏	表 裏	山前　智敬
		史跡大安寺旧境内（大安寺二丁目）	No9	南大門・復元への第一歩	表 裏	宮崎　正裕
	第５回 11.1～12.28	史跡大安寺旧境内（大安寺二丁目）	No10	大安寺・南大門跡から出土した天平の仏像	表	宮崎　正裕
					裏	三好　美穂
		水間遺跡（水間町）	No11	奈良市東部の複合遺跡 ―縄紋から安土・桃山時代まで―	表 裏	大窪　淳司
平成14年度 (2002)	第６回 7.22～10.18	平城京東市跡推定地（杏町）				
	第７回 2.1～3.31	水間遺跡（水間町）	No12	水間の古墳と総柱建物群	表 裏	大窪　淳司



調査地位置図　1/50,000（番号は、リーフレットの番号に対応する）

目　次

口絵１　陶製（須恵質）の井戸側（枠）出土状況
口絵２　神功開寶の鋳放し銭と鋳型
口絵３　鋳造関連遺物（坩堝、鞴羽口、炉壁、銅滓、木炭、鋳棹、ほか）
口絵４　井戸に利用された須恵器大甕
口絵５　南大門の基壇外装
口絵６　人形木製品
口絵７　束になって出土した木製人形
口絵８　「伊勢竹河」と書かれた木製人形
口絵９　磚仏
口絵10　磚仏
口絵11　塑像（右－等身大立像の腕部、左－邪鬼の頭髪部）

陶製（須恵質）の井戸枠…… 1
神功開寶の鋳型と鋳造関連遺物…… 3
中世末の金貨（蛭藻金）…… 5
古墳時代後期の前方後円墳と埴輪の祭り…… 7
まじない!?　祈り!?　新発見の人形木製品 …… 9
京内最大の井戸と中から出てきた大量の人形……11
須恵器の大甕を再利用した井戸……13
平城京跡から出土した磚仏……15
南大門・復元への第一歩……17
大安寺・南大門跡から出土した天平の仏像……19
奈良市東部の複合遺跡－縄紋から安土・桃山時代まで……21
水間の古墳と総柱建物群 ……23

陶製（須恵質）の井戸枠

平城京跡（左京（外京）三条五坊三坪）　奈良市大宮町一丁目

調査の概要

JR奈良駅から北北西に約0.3kmの場所で実施した調査です。平城京の中では、左京三条五坊三坪という宅地に該当しており、平城宮から東南東へ約2kmの場所に位置しています。

発掘調査の結果、奈良時代のものと思われる井戸1基と建物跡2棟の遺構が見つかりました。中でも井戸は今まで類例のないもので、まず径約2.0m、深さ約2.7mもの大きな深い穴を掘り、その底に直径約93cm、高さ112cmの巨大な須恵質の井戸枠を設置していました。

須恵質の井戸枠 の上段には、木組の井戸枠があったと思われますが、抜き取られたためにか、ほとんど残存していませんでした。平城京内で使用されていた一般的な井戸枠は、上から下まで木組であることを考えると、このような井戸枠は特別な例であると言えるでしょう。

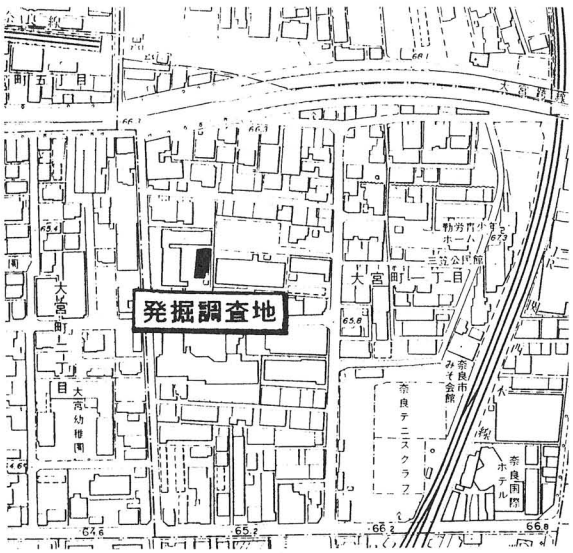
調査地付近の地盤は、粘土と砂礫が交互に堆積する比較的強固な地盤になっています。今から千二百年以上も前の奈良時代に、このような地盤の固い場所に、こうした大きな深い穴を掘る作業は、おそらく困難を極めたことでしょう。また、壊れやすい巨大な焼き物の井戸枠を、生産地から運搬してきて、さらに深い穴の底にうまく設置する作業についても、相応の技術がなければできなかったことと推測されます。

このほかに、弥生時代末期から古墳時代初期にかけての溝の跡も確認されました。溝の中からは当時の土器が大量に出土しました。

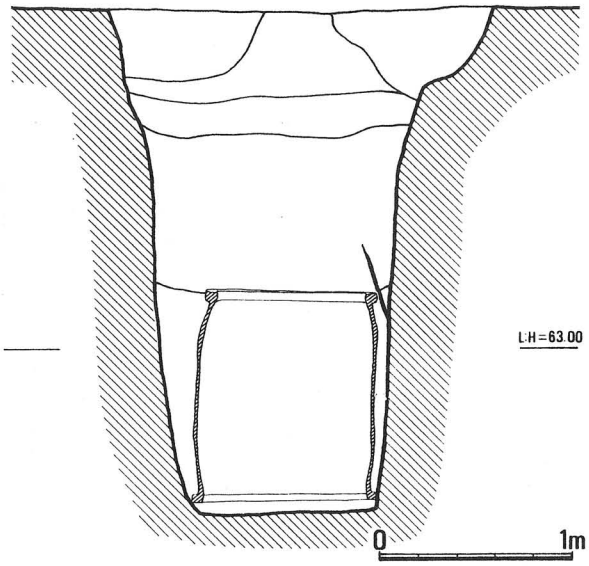
須恵質の井戸枠

大きさは、上部は直径89～98cm、下部は直径92～96cm、高さが108～112cmの円筒形をしています。縁帯部（上下にある帯部の縁）が6cmと分厚いですが、胴の部分は1.5～2.5cmと比較的薄く作られています。

このような巨大な井戸枠が平城京内でも一般的に使われていたとは考えにくく、特別注文による生産であったものと思われます。この井戸枠の発見は焼き物の歴史において重要なだけでなく、施主の身分を知る上でも大きな手がかりとなるでしょう。

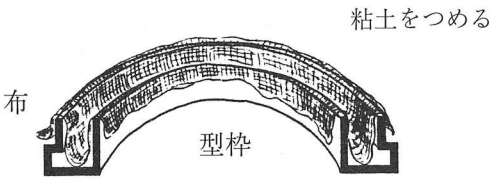


調査地位置図



井戸の断面図

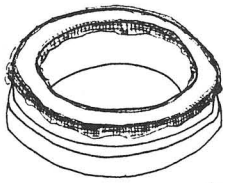
須恵質の井戸枠の作り方　表面に残された様々な痕跡を観察してくと、この須恵質の井戸枠がどのようにして作られたのか判るので、順を追ってみていきましょう。

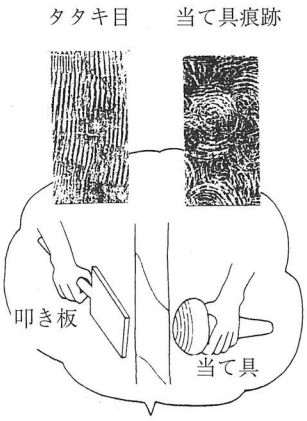


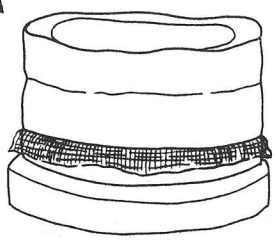
（型枠の材質はわかっていません）

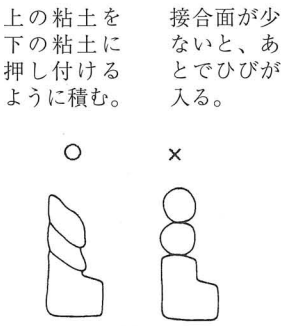
①　まず、型枠を用いて、下側の縁帯部を作ります。この時、粘土がくっつかないように型枠内に布を敷いてから粘土を詰めます。この時の布の痕跡が縁帯部の側面に残っていました。

②　円形状に作った縁帯部分を型枠に入れたまま少し乾燥させます。



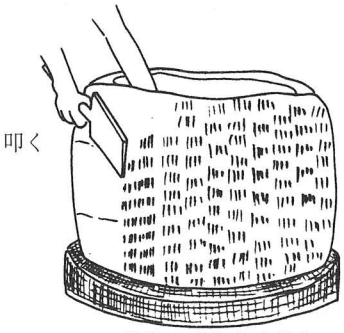






③　ある程度粘土が固くなったら、この上に帯状の粘土を積み上げて胴部を作っていきます。粘土のつなぎ目は微妙な凹凸が残っていることが多いので、この痕跡を観察すれば、何段分積み上げたかが判ります。この製品は、4～5段以上積み上げたようです。

④　積み上げる過程において、板で表面を叩いて粘土をのばしながら、円筒形に作り出します。外表面だけを叩くと変形するので、当て具を内側に当てます。この時に粘土の外表面についた痕跡を「タタキ目」、内側についた痕跡を「当て具痕跡」と呼びます。



この段階で型枠をはずす。

⑤　表面を叩いた跡、タタキ目を消すために板状の工具で内側と外側の表面を軽く削って整えます。

⑥　最後に、上端に厚めの粘土を積み上げて縁帯部を作ります。板状の道具で形を整えてから、なめし皮か布で横方向にナデて仕上げます。

⑦出来上がり

神功開寳の鋳型と鋳造関連遺物

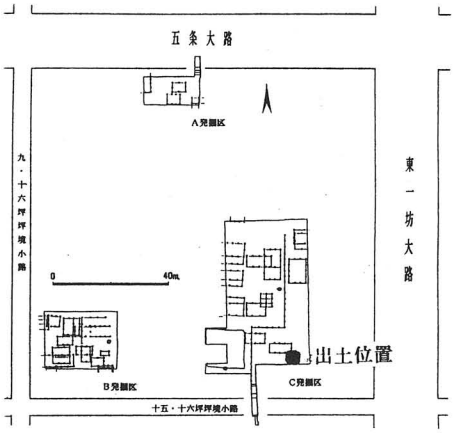
平城京跡（左京六条一坊十六坪）　奈良市柏木町

埋蔵文化財センターから西へ約300mのところで、大規模店舗建設が計画され、事前に発掘調査を行ないました。その結果、奈良時代の多くの掘立柱建物・塀、井戸のほか、周囲の道路が見つかりました。奈良時代の建物は、遺構の重複関係から、3回以上の建て替えが見られます。

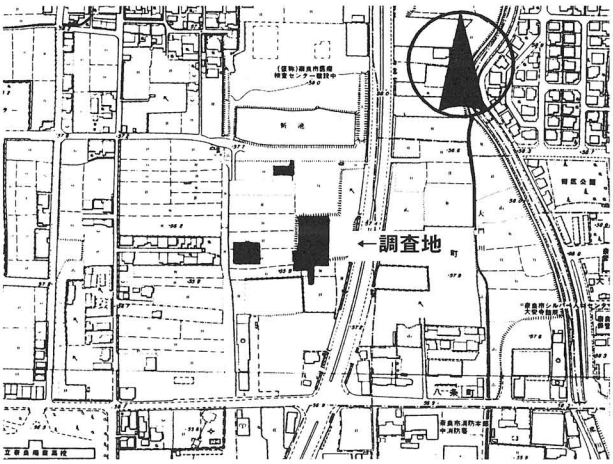
このうち、井戸のひとつから神功開寳（初鋳765年）の鋳型とその鋳放し銭（鋳型からはずしたままの未整形の銭）が発見されました。鋳型の全形は不明ですが、残る破片から厚さ1cmほどの粘土板の上に厚さ0.5cm前後の真土（粘土に細かい砂をまぜたもの）を重ねた「焼型」であることが考えられます。また、鋳放し銭は字体がいずれも異なっています。なかには、湯（溶かした銅）が銭笵内の途中までしかまわらず、形が不完全なものがあります。また、字の一部がつぶれていたり、鋳型が割れてそこに余分な鋳張りがついていたりといずれも失敗品です。これらは奈良時代の末頃に井戸の木枠を抜き取ってから埋め戻した土の中に混ざっていたもので、このほかに、以下のような鋳造関係の遺物が出土しています。

鋳棹、これには左右段違いに切られた浅い堰（銭笵につながる溝）が残っています。原料の銅を溶かすための坩堝、炉に差し込んで空気を送るために鞴の先につけた羽口、炉壁、銅滓（銅を溶かした時にできたかす）、飴状にとけた銅滓が付いた瓦、これははっきりとした用途はわかっていませんが、丸瓦を縦半分に割ったもので、風よけなどに立てて使われたと考えられます。それから木炭があります。炉の遺構は残っていませんでしたが、十六坪内に神功開寳の鋳造を行なった工房があったと推定されます。

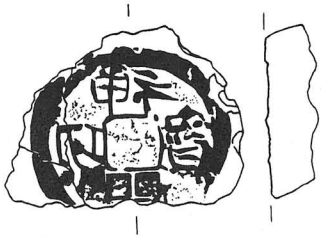
古代に発行された皇朝十二銭のうち、鋳型や鋳放し銭が見つかっているのは和同開珎（初鋳708年）のみで、今回発見された神功開寳の鋳型は、貨幣鋳造の歴史を考える上で貴重なものです。



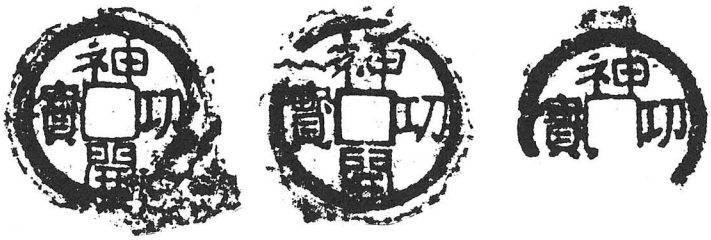
左京六条一坊十六坪遺構概念図



調査地位置図

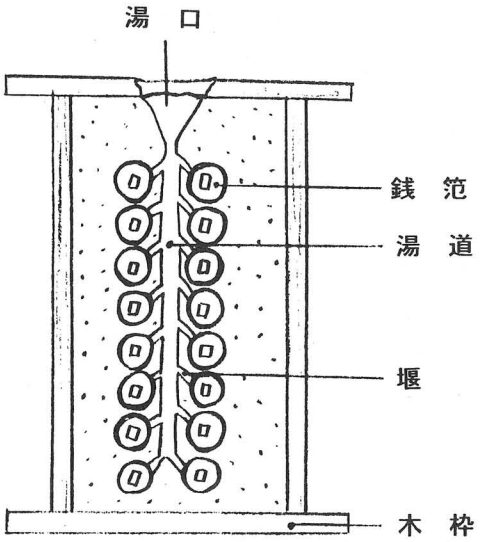


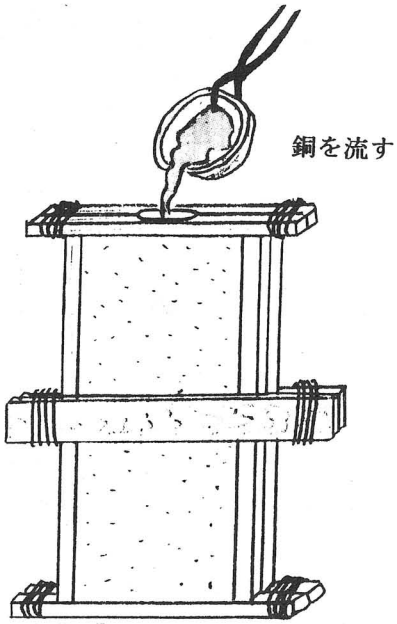
神功開寳の鋳型　実大



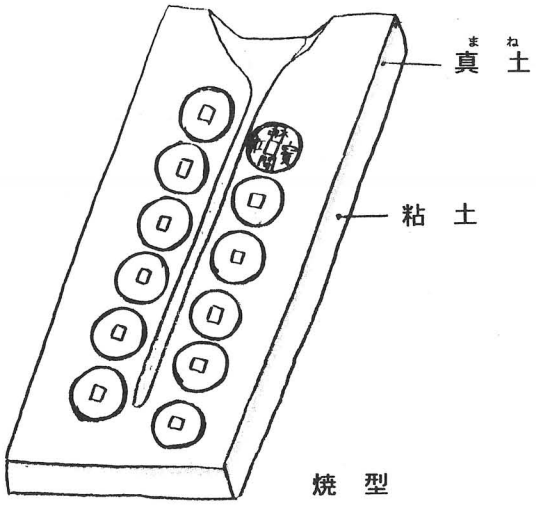
神功開寳　実大

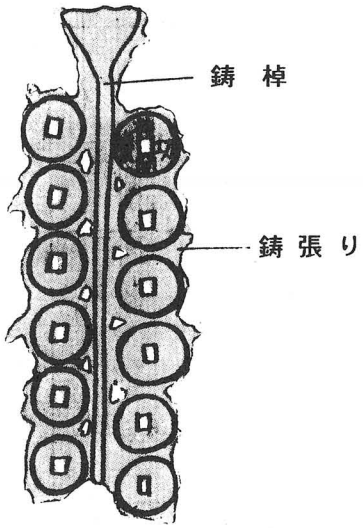
・鋳型（銭笵）の名称



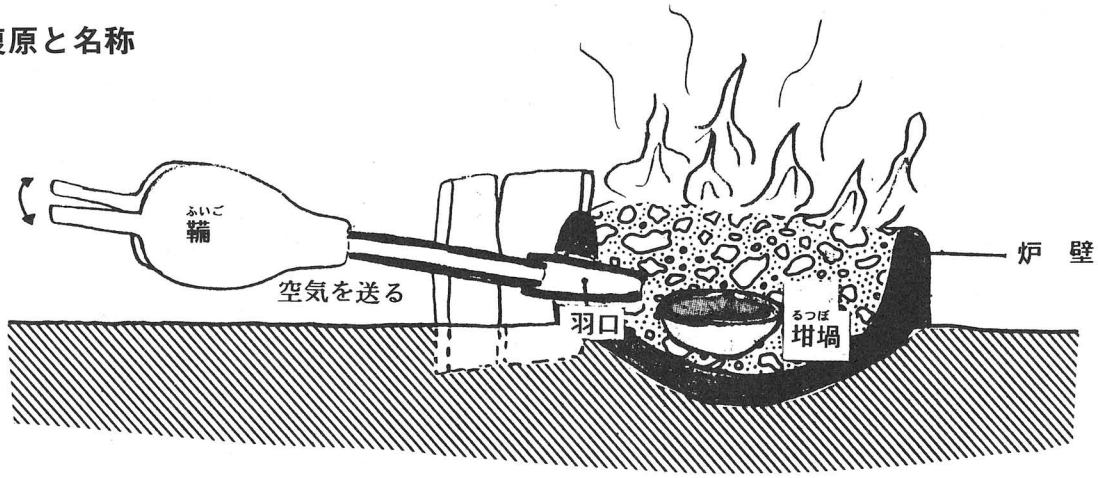


・鋳上がりの復原と名称





・炉の復原と名称



中世末の金貨（蛭藻金）

奈良町遺跡　奈良市北室町

調査の概要　調査地は、南都七大寺のひとつ、元興寺の食堂の西側にあたり、また江戸時代には奈良町として発達してきたところにあたります。調査の結果、奈良・平安・鎌倉・室町・江戸時代の人々の生活のあとが見つかりました。

奈良時代の元興寺に関わる建物跡などは見つかりませんでしたが、調査地内からは古代の瓦が大量に出土しました。これらは鎌倉時代初めに掘られた東西南北約16m、深さ約20㎝の不整形な土坑などから出土しました。このことは周辺に瓦葺き建物が存在していたこと、その建物が鎌倉時代初めまでには壊れていたことを示しています。

室町時代になると、周辺は寺から町へと変化していったようで、当時の文献には「北室郷」の名で出てきます。

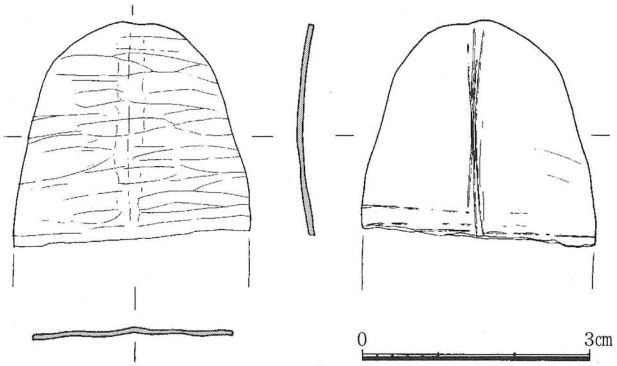
調査地では蔵が見つかりました。蔵の中は地面に穴を掘り大甕を据えていました。これらの甕は全部で46個以上あったことがわかりましたが、大半が抜き取られており、そのうち14個に大甕の下半分が残っているのみでした。大甕は常滑焼と備前焼の甕で、容量は2～3石（360～540ℓ）あり、その中には油等の液体が貯蔵されていたと考えられます。大甕の中には炭や焼けた壁土が入っており、この蔵が火災にあって失われたことがわかります。

江戸時代には、井戸が9基掘られていました。江戸時代中頃の1基を除き、他は江戸時代前半のものです。これらの井戸からは大量の土器と共に、鉄滓やフイゴの羽口、坩堝など鋳造関係の遺物が出土しており、周辺には金属生産の工房があったと想定されます。

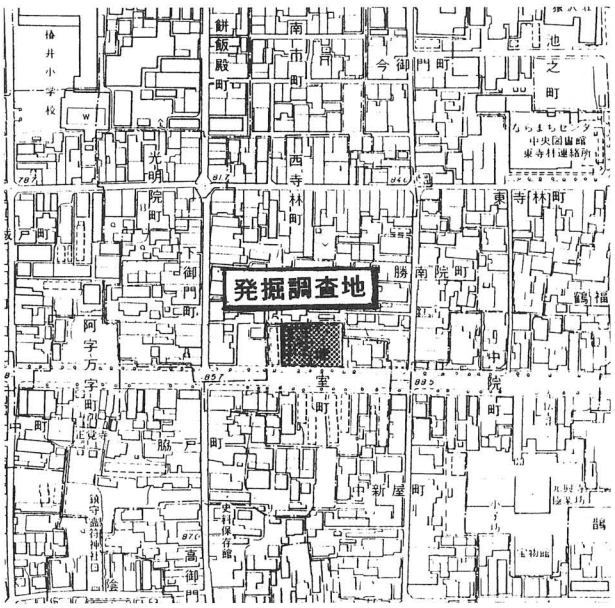
出土遺物は、土器、瓦類、銭貨などが遺物整理箱約250箱分ありました。特に古代の瓦、江戸時代の土器・鋳造関係遺物が多く出土しました。その他、蛭藻金1枚、銅銭14枚などがあります。

今回の発掘調査では、残念ながら奈良時代の元興寺の食堂に関する手がかりを得ることができませんでしたが、鎌倉時代以降の奈良町の変化を知る資料が多く得られました。

調査地周辺では鎌倉時代頃に寺から町へと変化し、特に室町時代には埋甕を約50基設置した蔵が建てられたことがわかりました。蔵が焼失した後、江戸時代の前半には金属生産を生業とした人々が住んでいたようです。



蛭藻金図



調査地位置図

蛭藻金（ひるもきん）について

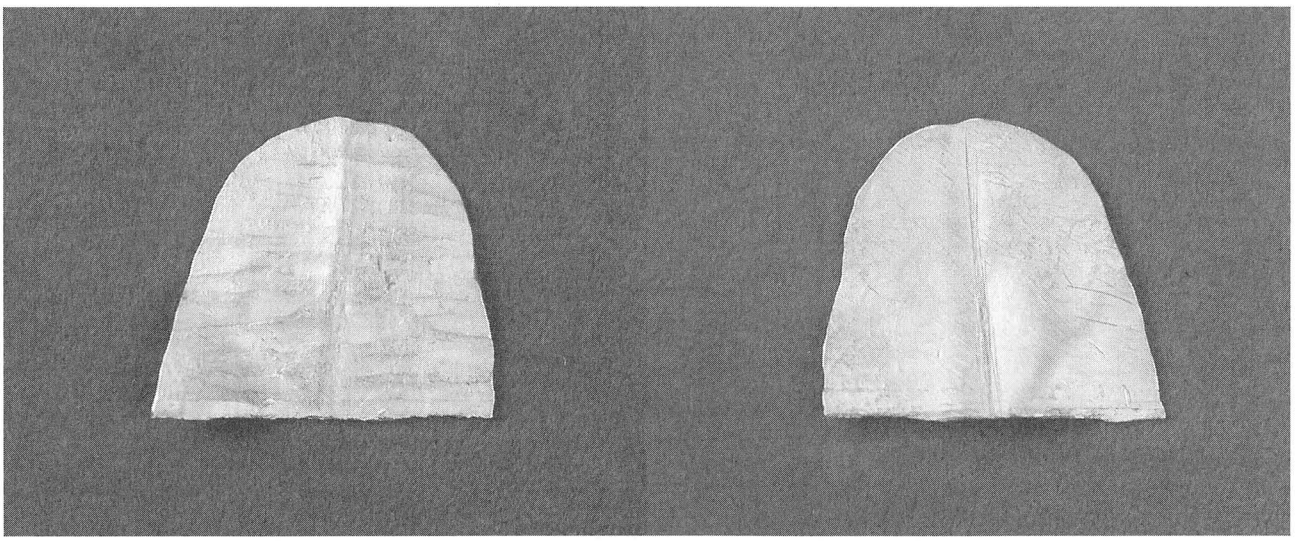
今回の発掘調査で特筆すべき遺物に、安土桃山時代の金貨「蛭藻金」が1枚あります。蛭藻金は金塊（きんかい）を叩き延ばして長楕円形の薄板状にしたもので、植物の蛭藻の葉の形に似ていることからそう呼ばれています。蛭藻金の表面には横方向のウロコ状の槌目（つちめ）が全面に施されていますが、裏面は槌目がなく平滑となっています。北室町出土の蛭藻金は、横方向に切り取られており、端部が半円形に残っています。残存している大きさは、長さ2.8cm、幅3.1cm、厚さ0.1cm、重さ8.4gあります。火災で焼失した室町時代の蔵の上を覆っている層から出土しており、また、この層の上から17世紀初めの井戸が掘り込まれています。このことから、この蛭藻金は16～17世紀初め頃のものと考えられます。

これまで蛭藻金が出土しているところは、下表の通りです。発掘調査で出土したのは、今回が初めてです。近畿周辺で出土しているのは、安土城城下町遺跡と一乗谷朝倉氏遺跡の2箇所で、いずれも16世紀後半の遺跡です。これらの蛭藻金はいずれも完存した品で、切り取って使用された例は北室町出土品以外にありません。

蛭藻金は、江戸時代の慶長小判の先駆けとなるものの1つでありますが、その詳細は不明な点が多く、今回の発見は、中世末から近世初頭にかけての貨幣経済の変化を考える上で貴重なものと言えます。

蛭藻金一覧表

	場所	遺跡名	大きさ（cm）		重さ（g）	備考	供伴遺物
			縦	横			
1	山梨県山梨郡勝沼町上岩崎		5.10	2.40	13.13	2枚出土	碁石金16
2	長野県諏訪郡諏訪町久保	諏訪大社下社秋宮	9.57	4.57	62.78	「上」の刻印	碁石金31
			7.66	5.06	75.33		金製刀金具
			4.28	1.87	14.83	「上」の刻印	
			5.32	2.49	16.49	「上」の刻印	
			4.68	2.22	14.89	「上」の刻印	
			4.25	2.41	14.47		
			4.80	2.14	14.38	「上」の刻印	
			6.30	2.97	27.41		
			6.45	2.07	13.18		
			3.70	1.59	17.61		
			4.52	1.92	14.34		
3	滋賀県安土町	安土城下町遺跡	7.30		32.53	三つ星の刻印	
			6.10		15.72		
4	福井県	一乗谷朝倉氏遺跡	7.20	2.00	22.00		
5	奈良市北室町	奈良町遺跡	2.80	3.10	8.40		



奈良町遺跡出土　蛭藻金（左-表、右-裏）

古墳時代後期の前方後円墳と埴輪の祭り

ヤイ古墳　奈良市法蓮町

調査の概要　調査は、佐保小学校の北側、通称一条通の北側で行いました。

平城京の一条南大路の北側にあたり、ここを平城京外と考える説と一条南大路より北にも南北二坪分の条坊が存在したと考える説があります。このため、調査は奈良時代の遺構の確認を目的として行いました。

ところが、古墳時代後期の前方後円墳を発見することになり、小字名からヤイ古墳と仮称することとなりました。

調査地の北側には、丘陵上に那羅山古墳群がありますが、調査地付近はこれまでの発掘調査からむしろ古墳時代の集落と考えられていたところです。

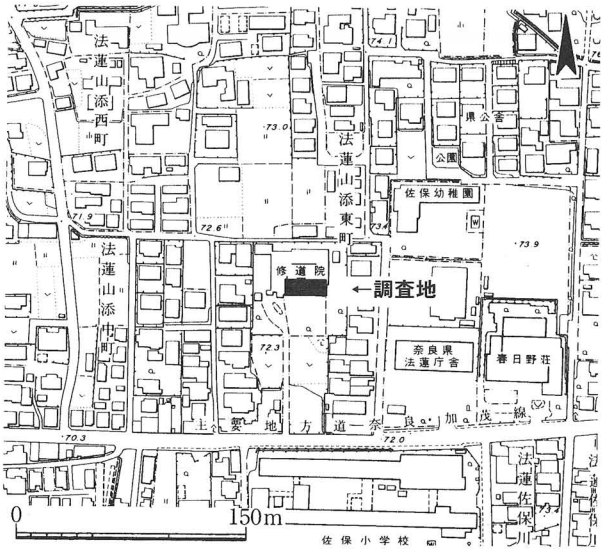
ヤイ古墳は、復原全長約18.5mの前方後円墳で、周濠があります。周濠を含めた全長は約24mになります。墳丘は後世に削られており、埋葬施設は不明です。

後円部は復原径約15mで、周濠底からの高さは0.5～0.9mくらい残っています。くびれ部の幅は約6.2mです。前方部は短く、長さ約3.5mで、前端部はやや開いて復原幅は約8.6mです。前方部前端の周濠は浅く、約0.2m残っています。

周濠の幅は、前方部東側で約2.2mですが、後円部側では約5.5mとなり、やや広がります。これは、隣接する古墳の周濠と重なっているためかも知れません。前方部西側では約8.0mで、東側と比べて非常に広くなっています。前方部の両側では周濠の形が異なっている可能性もあります。前方部前端の周濠幅は狭く、約1.2mです。

周濠内から、古墳時代後期の埴輪、須恵器、土師器が出土しました。

埴輪は、周濠の上位から多く出土し、特に前方部東側から多く出土しました。墳丘の上にあったものが、削られた際、周濠内に捨てられたものと考えられます。



調査地位置図

土器は、須恵器杯と提瓶が前方部前端から出土しました。また、くびれ部西側では底から赤色顔料を入れた土師器甕が出土しました。おそらく埴輪に塗った顔料をそのまま甕に入れて置いたものでしょう。

ヤイ古墳は、今から約1450年くらい前の6世紀中頃（古墳時代後期）に造られました。それは、出土した土器や埴輪の形や作り方からわかります。

奈良市内では6世紀以降の前方後円墳はこれまで発見されておらず、奈良市域の最後の前方後円墳として位置付けられます。

また、前方後円墳としては、非常に小さいことも特徴です。

奈良県内の前方後円墳（前方後方墳を含む）の総数は約260基、近畿圏（奈良・大阪・兵庫・京都・滋賀・和歌山の6府県）内では約830基ありますが、ヤイ古墳は、奈良県内では最も小さく、近畿圏内でも11番目に小さい前方後円墳です。ヤイ古墳の大きさは、6世紀最大の前方後円墳、橿原市見瀬丸山古墳（墳丘長約310m）と比べると、その1/17に過ぎないのです。

埴輪の祭り

ヤイ古墳の埴輪は、すべて周濠から出土しました。大半は円筒埴輪ですが、人や物を象った形象埴輪もあります。

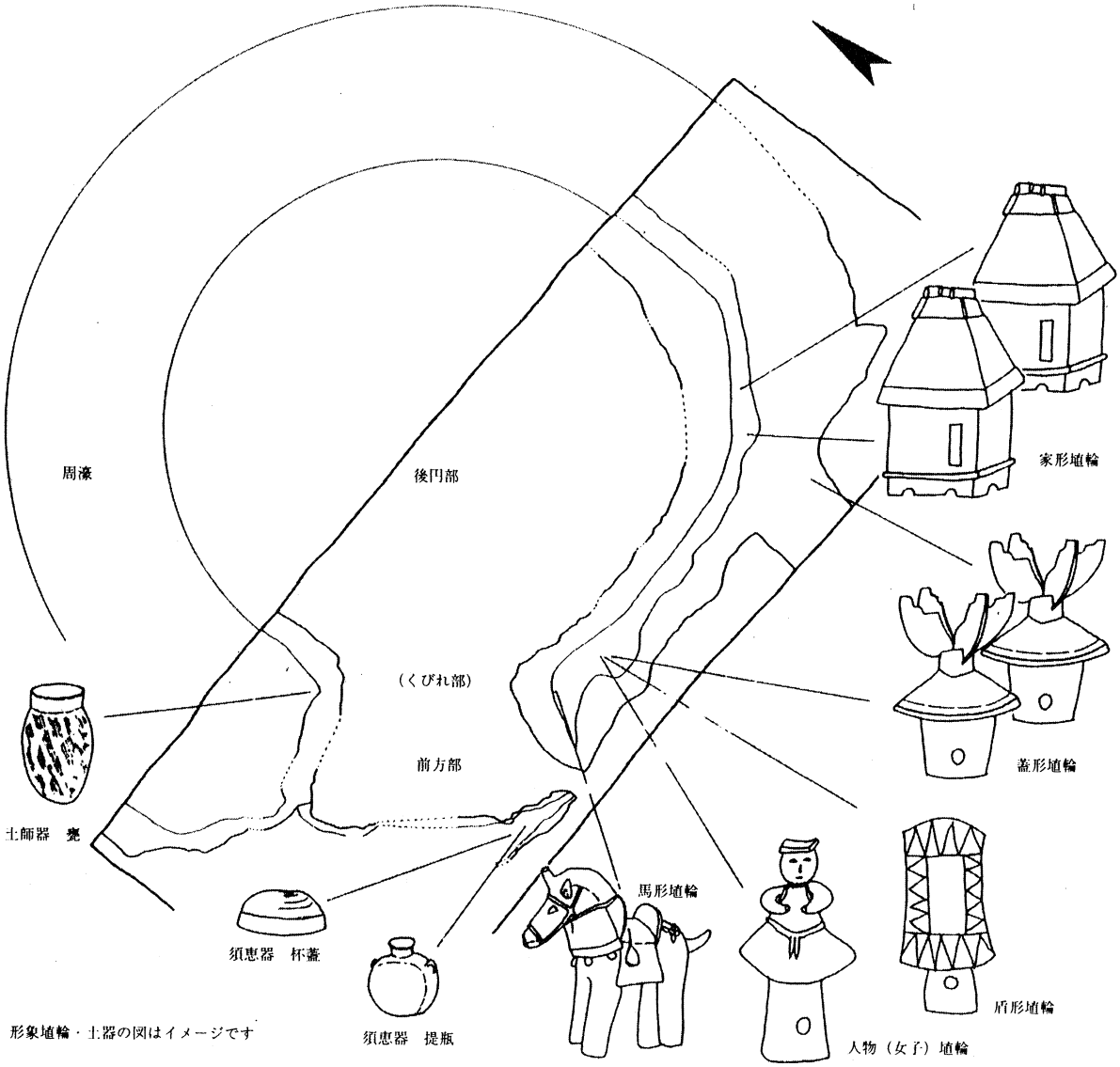
形象埴輪のうち、家形埴輪や蓋形埴輪は後円部側から出土していることから、円筒埴輪とともに墳丘の周囲に立てられた埴輪列のなかに置かれていたものと思われます。また、馬形埴輪や人物埴輪（女子・男子）、盾形埴輪、蓋形埴輪は、くびれ部付近で出土しており、前方部に並べられていたものと思われます。

古墳時代後期になると、後円部で行われていた埴輪の祭りは、前方部で行われるようになります。あるいは、埋葬施設が横穴式石室の場合は、石室の羨道やその前で行われるようになります。

ヤイ古墳は、大量の埴輪が周濠から出土したにもかかわらず、石室の石材と思われるものは出土していないことから、横穴式石室ではなく、木棺をそのまま埋葬した可能性が高いでしょう。

須恵器や土師器も前方部のまわりで見つかっていることから、ヤイ古墳の埴輪の祭りは前方部で行われたとみて良いでしょう。

須恵器の飲食器や、手を前に出し、食物の入った容器を持っていたと思われる女子の埴輪が出土していることから、飲食物を供える祭りが行われていたのかもしれません。



ヤイ古墳の形状と形象埴輪・土器の出土位置

まじない!?　祈り!?　新発見の人形木製品

平城京右京二条三坊二坪　奈良市青野町

調査の概要　調査地は、平城京条坊復原で右京二条三坊二坪の北半部にあたります。この坪ではこれまで4回の調査を行っており、平成11年度でほぼ全域の調査を終了しました。その結果、縄文時代から鎌倉時代までの数多くの遺構・遺物が見つかりました。平成11年度の調査では、奈良時代の遺構として、掘立柱建物跡55棟、掘立柱塀跡11条、井戸17基、土坑7基、溝9条などが見つかり、このほか鎌倉時代の土坑や溝も見つかりました。

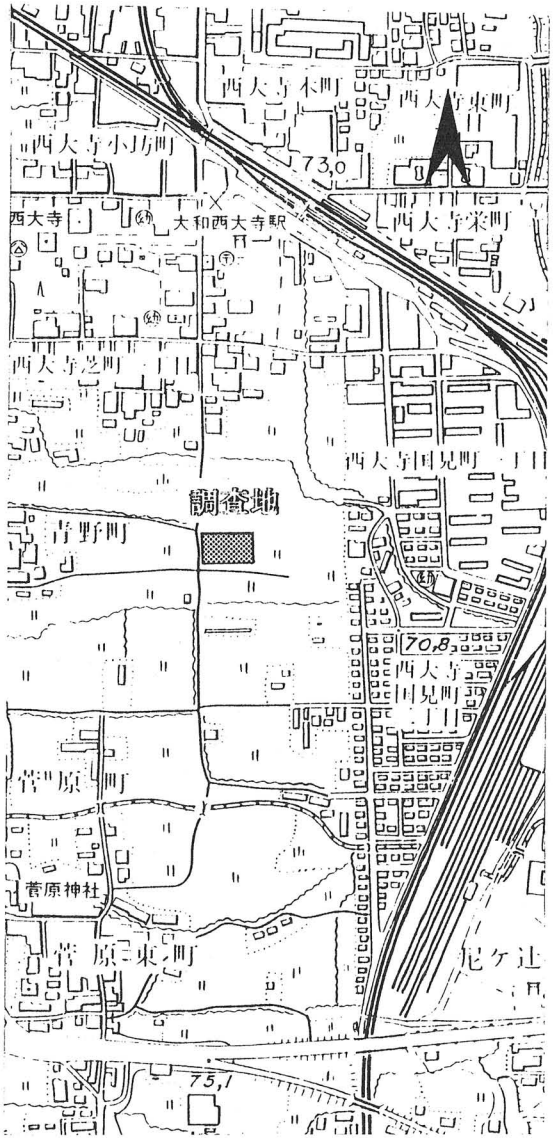
過去の調査成果とあわせて、奈良時代のこの坪の利用の仕方を考えてみると、塀や溝が坪をちょうど二等分したり四等分したりする位置に設けられていることがわかってきました。このことは坪の中がいくつかに分割されていたことを示していると考えられます。

当時の文献資料から、最小の個人宅地としてわかっているのは32分の1坪という広さですが、この坪でも最も小さく分割された宅地は坪の32分の1の広さだったようです。広さによる宅地の割り当ては、そこに住む人の位によって決まりますが、この坪内には下級の役人が住んでいた場所もあったようです。

また、各宅地には必ず一つ以上の井戸が掘られました。一見無造作に掘られているような多数の井戸も、小さな宅地では一つ、大きな宅地では二つというふうに、分割された宅地ごとに配置されている様子がわかりました。

これらの井戸の作り方は様々で、板を縦にして組んだものや横にして組んだもの、底に曲物を据えたものなどがあります。なかには廃材（扉板など）を井戸枠材として再利用したものもあります。そして井戸を廃棄する際には、底に土器を沈めたり、使える材木を抜き取っていったりとさまざまな行為がなされています。なかには現在でも見られる「気抜き」のための筒を、丸瓦を組み合わせて作っているものがあり、奈良時代からその風習があったことがわかりました。

これらの井戸からは多くの遺物が出土しますが、井戸の中は水分が多いため木製品や金属製品もよく残っています。発掘区西南部で見つかった横板組隅柱留と呼ばれるタイプの井戸からは人形木製品や4枚の銅銭が出土しました。また、この井戸のまわりからは、普通は使うことのできない釉薬をかけた瓦（三彩瓦）も出土しています。



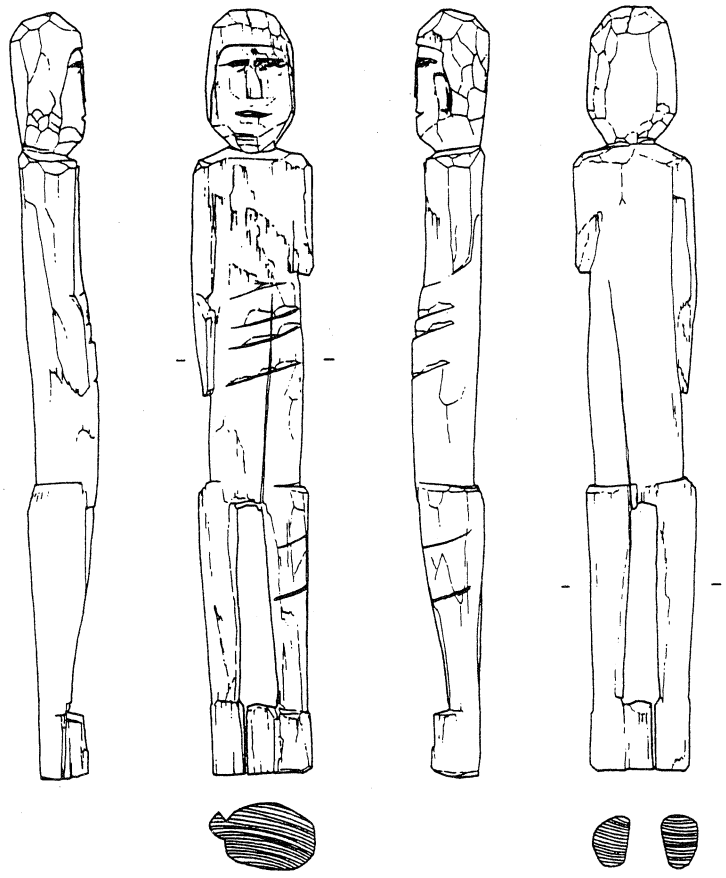
調査地位置図　1/10,000

人形木製品について　平成11年度の調査で見つかった井戸の1つから、8世紀末～9世紀初めの遺物とともに、人物を形作った木製品が出土しました。この人形木製品は、高さ19.9㎝、最大幅3.1㎝、最大厚1.9㎝で、ヒノキを用いています。左肘から胸の表面にかけては壊れていますが、ほぼ完形です。顔は彫刻された後、さらに目、口、耳を墨で描き、胴部には衣のヒダが彫り込みで表現されています。ではこの木製品はいったい何なのでしょう？

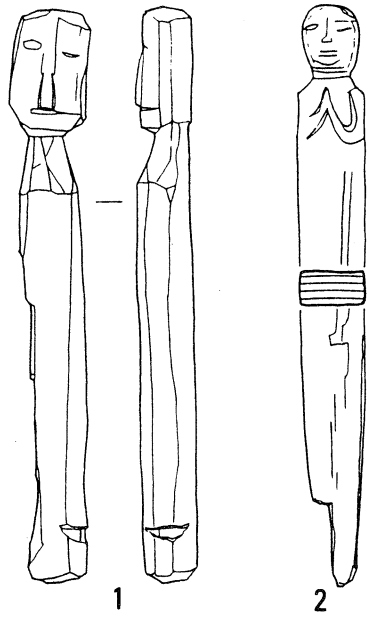
まず考えられるのが人形（ひとがた）です。これは「祓え」や「治療」のまじないに用いられるもので、生きている人間の形代（かたしろ）として作られるものです。平城京で発見されるものの多くは、薄板を使って扁平な人の形に仕上げたもので、顔も墨書だけで表現されます。その中にまれに立体的に作られたものがあり、立体人形と呼ばれます。しかしそれにおいても顔から下はかなり簡略的な表現がされるのが普通で、やはり形代として作られたものです（図1・2）。

次に考えられるのは仏像もしくは神像ですが、時期的には仏像の可能性が考えられます。軽く前に曲げて垂らした右腕、胴部の衣の表現などは仏像のそれと共通するものがあります。また頭部は仏に見られる髪際（はっさい）を表現したものとも考えられます。足のように見える下部は差し込み部等と考え、像本体とは別として見ると、実に仏像とよく似ています。もちろん仏師が彫ったものとは大きく異なりますが、当時は一般庶民が仏像を彫ることもあったようで、子供でさえ遊びで仏様を彫ったということが文献から知られます。ただし今のところは人形とも仏像とも判断はしかねます。

いったいこの木彫りの人物にはどんな思いが込められていたのでしょうか。



平城京右京二条三坊二坪出土人形木製品　1/2



立体人形の例

1. 兵庫県吉田南遺跡出土　1/2
（8世紀後半～9世紀）

2. 平安京西寺跡出土　1/2
（9世紀前半）

（いずれも『木器集成図録　近畿古代篇』奈良国立文化財研究所、1985年、より抜粋）

京内最大の井戸と中から出てきた大量の人形（ひとがた）

平城京左京一条三坊十三坪　奈良市法華寺町

調査の概要

調査地は、平城京条坊復原では、左京一条三坊十三坪にあたります。これまでの周辺の調査によって十三坪と北の十四坪とは一括して一つの宅地として利用されていたと推測されており、この坪にはかなり位の高い貴族が住んでいた可能性が考えられていました。

今回の調査で見つかった遺構には、掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）跡5棟、掘立柱塀（ほったてばしらべい）跡6条、井戸1基、石敷がありますが、これらの発見は調査前の予想をはるかに上回る成果となりました。

掘立柱建物のうち、最大のものは南北6m、東西24m以上の建物で、一般宅地にはあまり見られない大きさです。

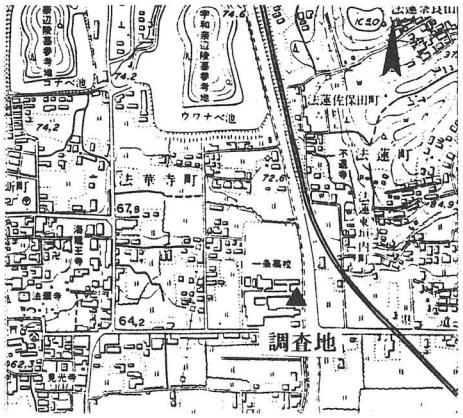
そして、今回発見された井戸は、枠を据（す）える穴の直径が6m以上もあり、井戸枠は約2.2m四方の非常に大型のものでした。この大きさは平城京で宮内のものを除けば最大であり、深さ4.6mという遺存状態と併せて見ればその規模は過去最大と言えるでしょう。

井戸枠は、井籠横板組（せいろよこいたぐ）みと呼ばれる組み方で、横板は全部で64枚残っていましたが、一枚の長さが2.5m、幅30㎝、厚さ15㎝もあります。これだけの材木を調達（ちょうたつ）するためには相当な権力が必要だったと考えられます。

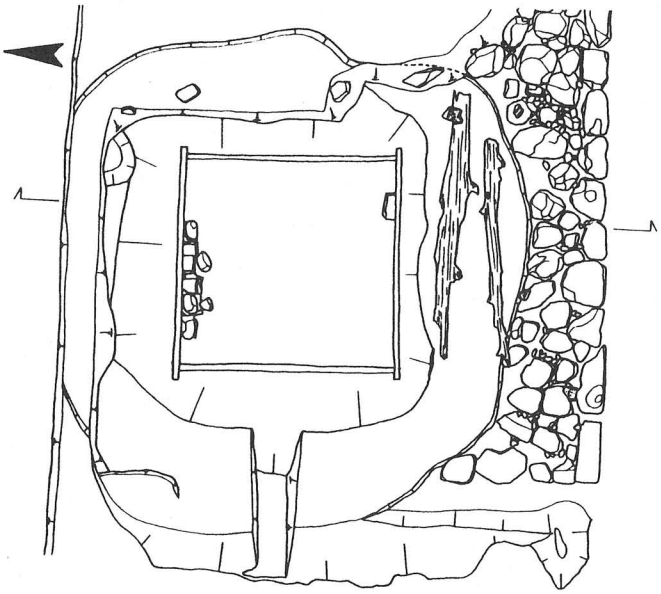
また、井戸の周囲には、人頭大の河原石を用いた石敷が広がっていました。大半は壊されていましたが、一辺約7mの正方形に敷かれていたと推定されます。

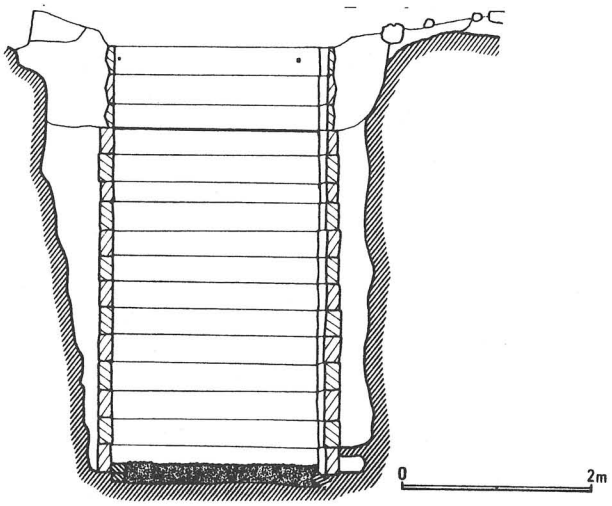
この井戸は、9世紀初め頃に造られ、廃棄後はゴミ捨て穴に利用されて、10世紀初め頃に埋まってしまいます。

都が平城京から平安京に移った後に、誰がこのような大型の井戸を造ることができたのか、大変興味深い問題です。



調査地位置図　1/20,000





井戸の平面及び断面図　1/80

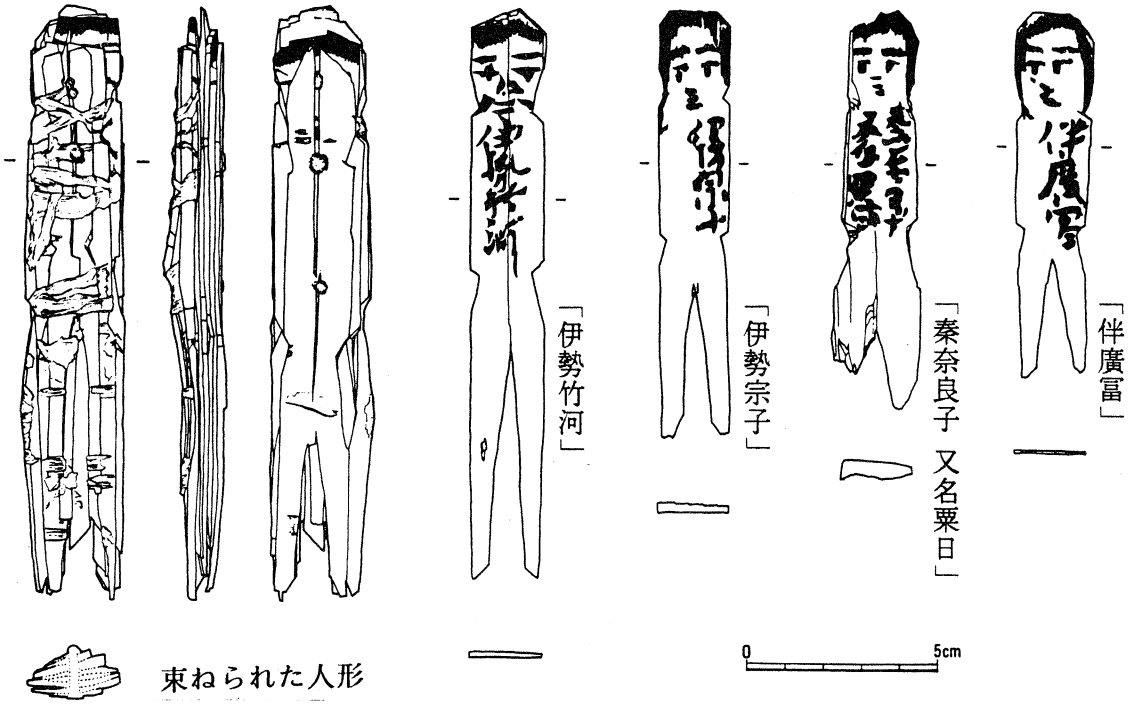
井戸に捨てられた人形　今回見つかった井戸の中からは実に様々な遺物が出土しました。土器や瓦はもちろん、人形・曲物・杓子・下駄・草履・鉄鏃・鉄斧・銭等のほか、馬や鹿の骨もありました。土器の中には墨で文字の書かれたものも多く、また緑釉陶器や輸入青磁もあります。

これらのうち特に注目されるのが人形で、出土枚数は94枚以上におよびます。人形とは、薄い板を人の形に似せて切り、墨などで顔を描いているものです。今回出土したものは全て頸・腰・足の表現を施し、腕は省略された形態のもので、胴部には人名が記されています。井戸の中からこれだけ大量に人形が出土した例は初めてで、しかもその出土状態は非常に珍しいものでした。100枚近い人形のうち約半分は、7・8枚ずつ束にされ紐や木釘で纏められていました。全部で8束見つかりましたが、完全に一束となっていたものは2組だけで、他は束がほどけて数枚ずつ抜けているようです。

この束ねられた人形には、全て「伊勢竹河」という人名が書かれており、顔にヒゲがあることから男性と判断できます。残り半分は、緑釉壺の中に桃の種や籾と一緒に入れられていました。前者よりも全体的に小さく、顔の表現は女性と思われます。胴部に書かれた人名は「伊勢宗子」、「秦奈良子　又名粟日」、「伴廣冨」の3種類があります。それぞれ6枚、17枚、13枚にその名前が確認できました。このように同じ人名が書かれた人形が何枚もまとまって見つかった例も初めてです。

この人形は同じ祭祀に使われた後、一括して捨てられたものと考えられ、人名に見られる4人は同じ屋敷で暮らしていた家族であった可能性が高いと思われます。今回の人形は、縛ったり木釘を打ったりと、一見すればまるで呪いの人形のように見えますが、これはあくまで束ねるための行為であって、本来人形は穢れを祓ったり、病気の治癒を祈って自分自身の形代として作られる場合が多いようです。

人形が捨てられた時期は、「嘉祥元年」(848年)と書かれた石より上で出土したので、9世紀の中頃から後半と推測されますが、この時期は巷に天然痘などの病気が流行していた頃で、この人形もそうした病気平癒のために使用されたものかもしれません。



木製人形　1/2

須恵器の大甕を再利用した井戸

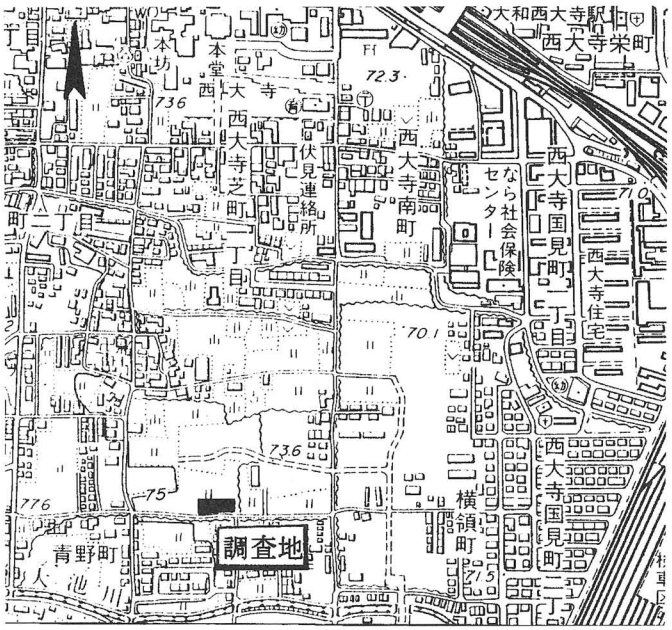
平城京跡（右京二条三坊十一坪）　奈良市菅原町

平城京右京二条三坊十一坪の発掘調査は、平成6年度から始まり、平成12年度で9回目となります。これまでの調査で、奈良時代から鎌倉時代の掘立柱建物・塀が約400棟、井戸が26基、溝などが見つかりました。平成12年度の調査では、興味深い井戸が1基見つかりましたので、それを紹介しましょう。

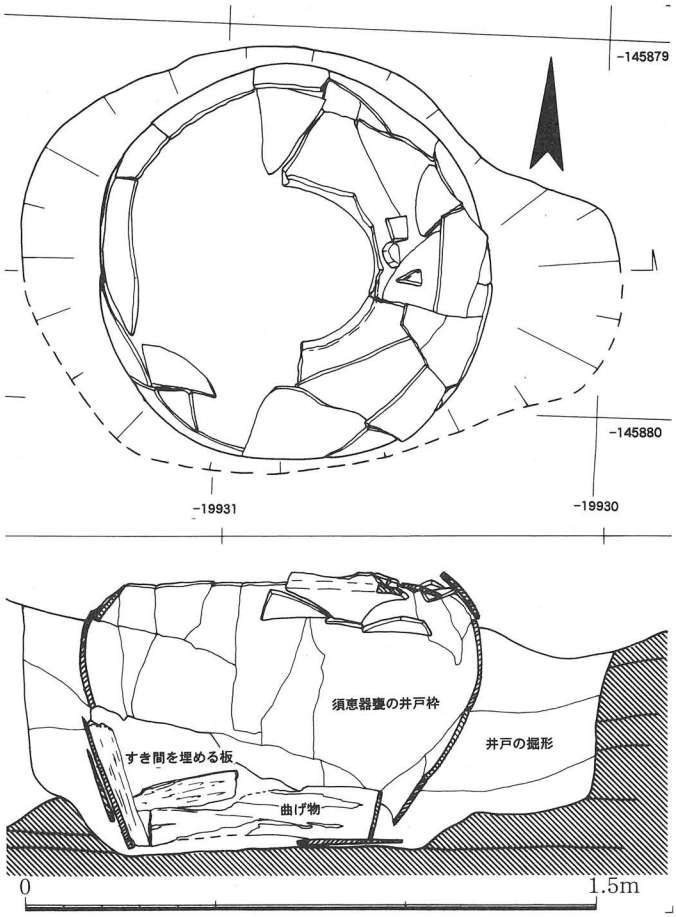
井戸の出土状態　井戸は、十一坪の南東隅で見つかりました。井戸から5・6歩も歩けば道路（坪境小路）に出てしまうほどの、敷地の隅です。井戸には、ふつう、壁が崩れて埋まらないように枠が設けてあります。奈良・平安時代では、通常、井戸枠を板で作りますが、この井戸は、須恵器の大甕を井戸枠に利用しています。この甕は最大径が約109cmもある大変大きなもので、当初は水などを貯えるのに使っていたと思われます。ところが、なんらかの理由で割れてしまったのでしょうか、水を貯えられなくなった甕は、今度は井戸枠として再利用されました。

井戸の構造を少し詳しく見てみますと、まず、東西約1.7m、南北約1.1mのいびつな楕円形の穴を掘ります。穴の深さは約88cmで、穴の底には灰色の砂の層があり、ここから水が湧いてきます。穴の底に直径約60cm、高さ約15cmの底のない曲げ物を置き、その上に須恵器の甕を置きます。甕は底の部分を割って筒抜けにしますが、うまく割れなかったのでしょうか、曲げ物との間に10cmから20cmのすき間があります。この部分を板で塞いで甕のまわりに土をいれて固定しています。甕の口は、もとはラッパ状に広がっていましたが、これも割り取られました。また、井戸には、地上に出ている井桁とよばれる部分や井戸を覆う建物（覆屋）などがあったと想定されますが、発掘調査では残念ながら見つかっていません。

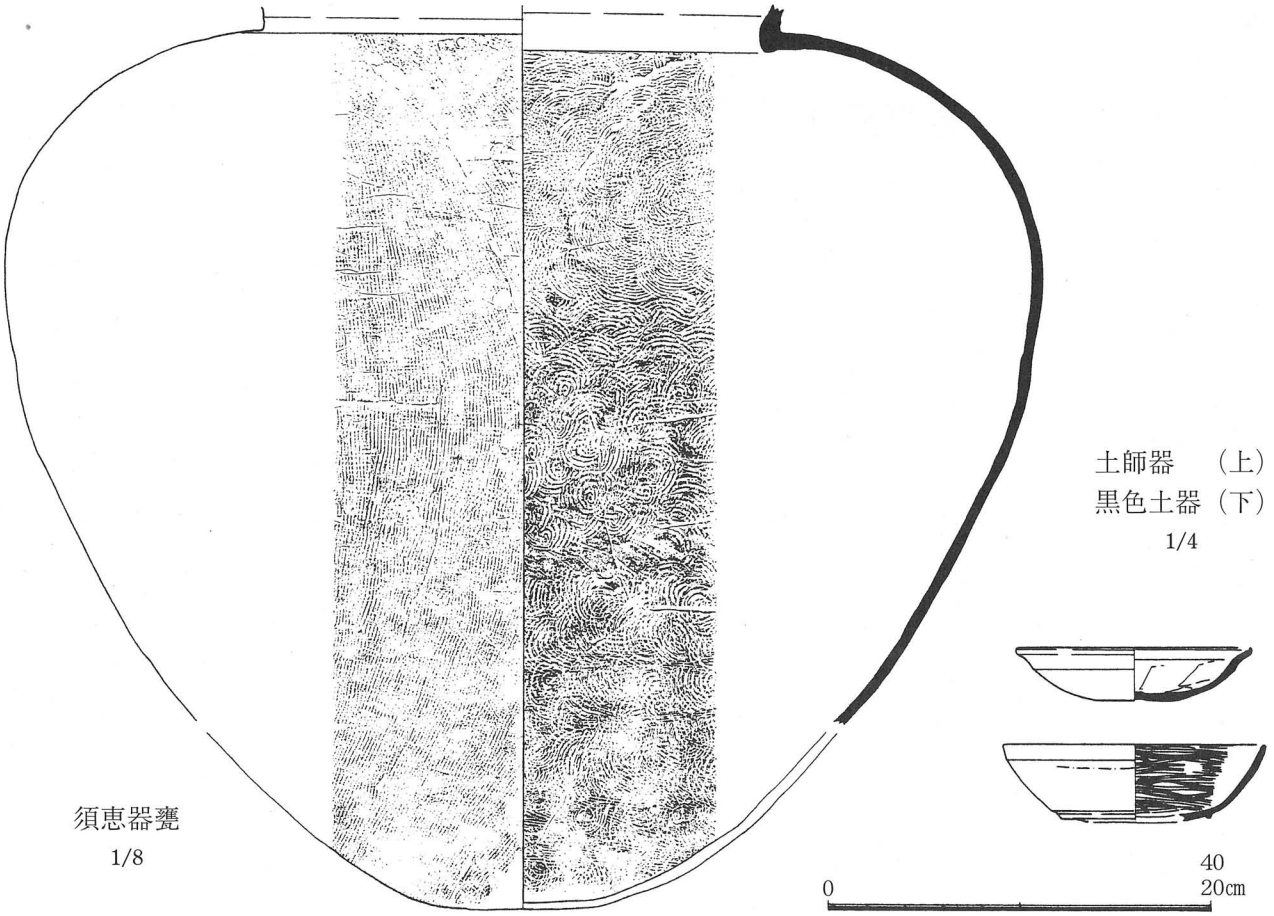
なお、この井戸は、出土した土器からみて、平安時代中頃には埋まったと考えられます。



調査地位置図　1/10,000



井戸の平面・立面図　1/20



井戸枠に利用されていた須恵器甕と、井戸から出土した土師器・黒色土器

須恵器とは　井戸枠に使われていた甕は、須恵器と呼ばれ、古墳時代に朝鮮半島から伝わった焼物です。須恵器は、それまでの弥生土器や土師器のように野焼きではなく、窯の中で高温で焼かれます。そのため粘土が焼き締まり、弥生土器、土師器に比べて水分の吸収性が少なく、液体を貯蔵する容器に適しています。今の大阪府堺市周辺には、古代の須恵器を焼いていた窯が多く残っています。当時の窯の大きさは、一般的に幅1.5～2m、長さ7～8mくらいです。このサイズの窯では、井戸出土の甕は10個程度が入るだけです。当時、須恵器の焼き上げには薪がたくさん必要なことや、失敗の率も高いことから、少数しか生産できない大甕は大変貴重なものだったでしょう。

須恵器の大甕　須恵器の甕は、最大径約109㎝で、高さは74㎝残っています。底は丸かったと推定されます。甕の容量は、残っている部分で約480ℓあり、全体を復元すれば約500ℓを超えるようです。これは灯油などを入れるポリ容器の25個分以上にあたります。古代の須恵器の甕の容量を調べますと、40ℓ以下の小型品と300ℓ以上の大型品に二分されるようです。小型品は今のポリ容器のようにものを入れて運ぶ容器として、大型品はドラム缶のようにある場所に据えて利用していたと考えられます。この須恵器甕も本来はどこかで据え置かれていたのでしょうが、このような底の丸い器はそのまま置くと倒れてしまいますので、地面に穴を掘って下半分を埋めて使用していたようです。

平城宮跡には、建物内に穴を掘って甕を多数据えていた建物があります。出土した木簡などからお酒を作っていた「造酒司（みきのつかさ）」という役所と考えられています。甕のなかに蒸米と麹（こうじ）を入れ発酵させてお酒を作っていたと想定されます。現在でも甕を数十個使ってお酒を作る酒屋があります。

調査地の東約200mの所でも甕を多数据えていた古代の建物跡が見つかっており、役所的な施設があったと推定されていますが、具体的に何の施設かはわかっていません。井戸枠に利用される前、この甕には何が蓄えられていたのでしょう？

平城京跡から出土した磚仏（せんぶつ）

平城京右京二条三坊十一坪　　奈良市菅原町
平城京左京三条二坊九坪　奈良市二条大路南一丁目

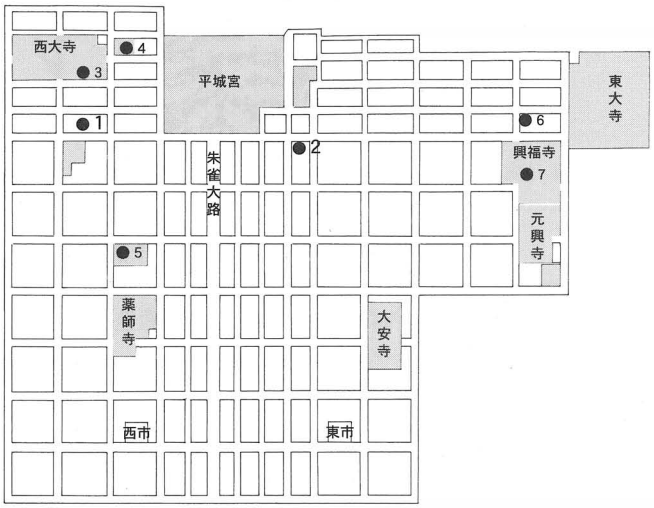
平成12年度に、平城京跡で行った2箇所の発掘調査で磚仏が1点ずつ出土しました。

平城京右京二条三坊十一坪（右図－1）

近鉄西大寺駅から約0.6㎞南西で実施した調査です。十一坪の南西隅にあたります。ここでは、古墳時代の溝3条、奈良時代の十一・十二坪坪境小路（つぼざかいこうじ）・同北側溝、掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）10棟、掘立柱塀（へい）6条、土坑（どこう）2、井戸3基、平安時代以降の掘立柱建物2棟、溝11条などが見つかりました。これらの遺構は重複関係からみて少なくとも6時期以上の変遷が考えられます。磚仏は奈良時代の遺物包含層から1点出土しました。

平城京左京三条二坊九坪（右図－2）

奈良市役所の駐車場で実施した調査です。九坪の北東部にあたります。ここでは、奈良時代より前の溝1条、奈良時代の掘立柱建物2棟、掘立柱塀3条、土坑2、井戸3基、溝8条などが見つかりました。これらの遺構は重複関係からみて少なくとも2時期以上の変遷が考えられます。磚仏は奈良時代の整地層から1点出土しました。

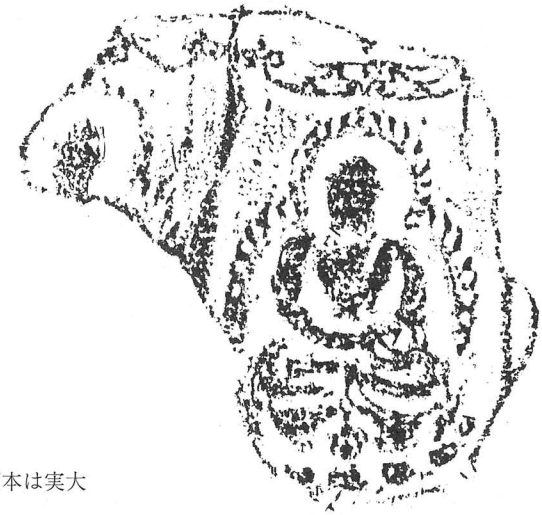


平城京内磚仏出土地

平城京域では、磚仏が7箇所から出土しています。それは下表の通りです。奈良市内では、ほかに、敷島町阿弥陀山寺跡（阿弥陀谷廃寺）で火頭形三尊磚仏と方形三尊磚仏、秋篠町・山陵町の秋篠・山陵遺跡で十二尊連坐磚仏、大和田町滝寺遺跡で独尊磚仏？、古市町の古市方形墳で方形三尊磚仏が出土しています。

平城京内出土磚仏一覧表

	遺跡名	出土地	種類名
1	平城京跡 （右京二条三坊十一坪）	奈良市菅原町	十二尊連坐磚仏
2	平城京跡 （左京三条二坊九坪）	奈良市二条大路南1丁目 （奈良市役所）	小型方形三尊磚仏
3	西大寺旧境内（西塔跡）	奈良市西大寺芝町	十二尊連坐磚仏
4	西隆寺旧境内（塔跡）	奈良市西大寺本町	十二尊連坐磚仏
5	唐招提寺旧境内（戒壇院跡）	奈良市五条町	小型独尊磚仏
6	平城京跡 （左京二条七坊三坪）	奈良市北魚屋西町 （奈良女子大学）	小型方形三尊磚仏
7	興福寺旧境内（南西隅）	奈良市登大路町	十二尊連坐磚仏

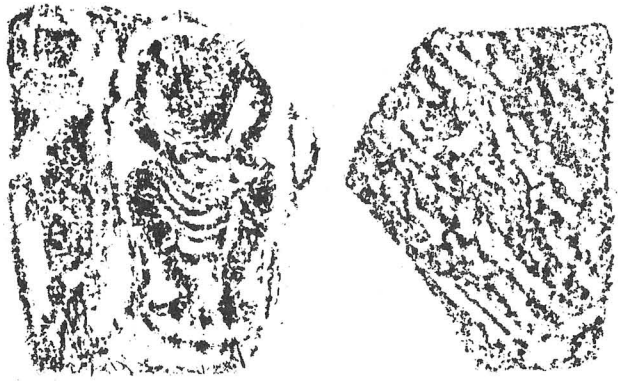


拓本は実大

平城京右京二条三坊十一坪出土磚仏

連坐磚仏と呼ばれるものです。連坐磚仏には、四尊のものと十二尊のものがありますが、四尊は上下、左右ともに2体ずつ、十二尊は上下3段に、左右4列に並べたものです。今回出土したものは、十二尊連坐磚仏で、十二尊のうち、二尊分が残存しており、高さ6.4㎝、幅7.1㎝、厚さ1.7㎝です。十二尊分すべて揃っていますと、高さ約18.0㎝、幅約14.0㎝に復元できます。尊像は蓮華座上に結跏趺座*1) して、印を結んでいるものと思われます。衲衣*2) は偏袒右肩*3) にまとっています。光背には頭光と身光があり、ともに火炎が施されています。頭光の上には天蓋*4) があります。それぞれの尊像の間は、凸線で区画されています。

*1) あぐらに近いのですが、必ず足の裏は上に向けます。
*2) 体に巻き付ける布のこと。
*3) 左の肩だけに布を巻き付け、右の肩をあらわにする。
*4) 日光をさえぎるために、貴人にさしかけられる傘のようなもの。



表面　　裏面

拓本は実大

平城京左京三条二坊九坪出土磚仏

小型方形三尊磚仏と呼ばれるものです。中尊と向かって左の脇侍部分が残存しています。高さ5.0㎝、幅3.9㎝、厚さ1.1㎝です。橘寺旧境内や川原寺跡（奈良県明日香村）から出土している方形三尊磚仏は、高さ22.0㎝前後、幅18.0㎝前後の大きさで、これに比べて小さいことから小型を付して呼びます。中尊は宣字座*5) に倚座*6) して、印を結んでいるものと思われます。両足で蓮華座を踏んでいます。衲衣は偏袒右肩にまとっています。首から上は欠損しています。向かって左の脇侍は、全体に摩滅や欠損が激しいので、詳細はわかりませんが、蓮華座上に立ち、左手で何かを持っていることが確認できます。中尊の左側には、脇侍の右手と思われるものが見えます。

*5) 仏像がのる台の一つ、全体の形が「宣」の字に似ていることからそう呼ばれます。
*6) 椅子に腰掛けるように座ること。

磚仏とは、笵型に粘土をつめて半肉彫りの仏像を作り、型から粘土を取り出して乾燥させ、それを焼いて作ったものです。金箔や銀箔を貼ったり、彩色したりします。最大の利点は型を使用しますから、同じものを簡単にしかも大量に作ることができるということです。日本で磚仏が盛んに作られるようになるのは、7世紀後半から8世紀中頃にかけてです。7世紀後半より古いものはまだ知られていません。奈良時代よりあとの時代のものもありますが、数的にみるとごくわずかしかありません。用途については、塔堂内の壁面を飾るもの、念持仏として用いられたもの、厨子の奥壁や扉につけて用いられたものではないかという3つの考えかたがあります。今回、平城京内から出土した磚仏は、数が少ないことから考えると、念持仏として使われたのではないかと思われます。

南大門（なんだいもん）・復元への第一歩

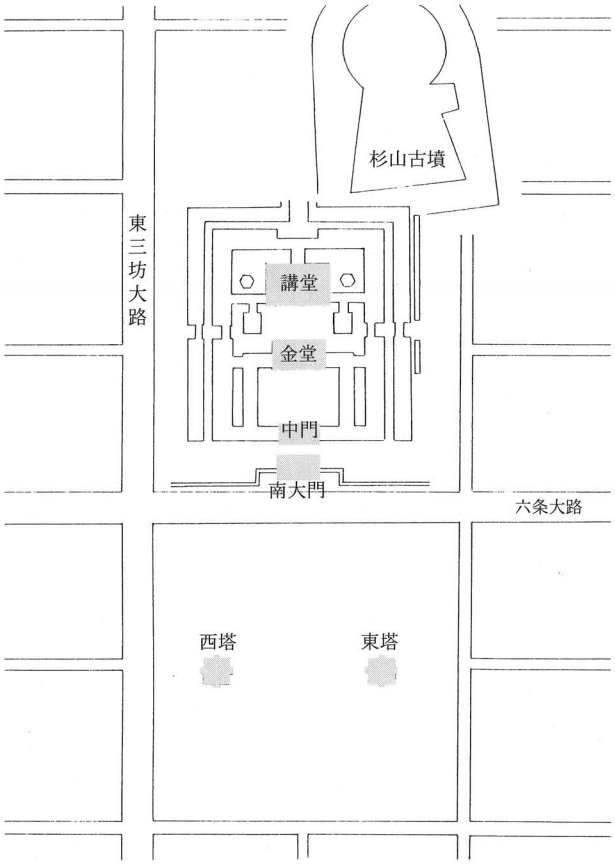
史跡大安寺旧境内　奈良市大安寺二丁目

大安寺は、藤原京から平城京へ遷都された際に大官大寺（だいかんだいじ）を遷（うつ）した寺です。奈良時代の大安寺は、平城京左京六条から七条にかけて十五町（総面積約265,000m²）分を占める大伽藍（がらん）でした。六条大路の南に東西の塔が、六条大路の北に南大門、中門、金堂、講堂が南北に並んでいました。大正10年に塔跡が、昭和43年には旧境内全域が「史跡大安寺旧境内」として国の史跡に指定されました。

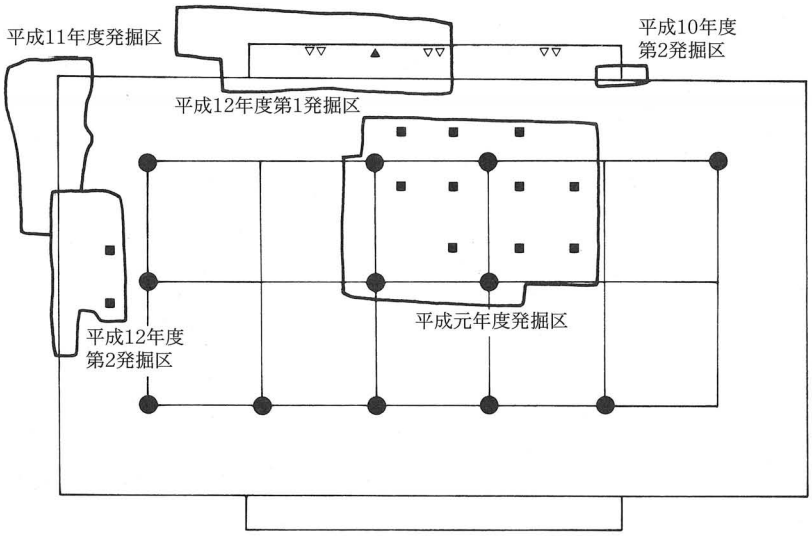
南大門は、昭和29年から数回、発掘調査が行われていますが、近年は、史跡整備の一環で、南大門の基壇の復元を目的とした発掘調査を行っています。平成12年度に基壇（きだん）の北端を調査したところ、階段が大変良く残っていました。そこで、現在までの南大門に関わる調査の成果を紹介します。

昭和29年の発掘調査　すでに基壇上面が削られ、門の礎石（そせき）も抜き取られていました。しかし、その据（す）え付（つ）け穴の位置関係から柱の間隔がすべて17尺（5.1m）であり、平面規模が平城宮朱雀門（すざくもん）と同じ東西（桁行（けたゆき））5間、南北（梁間（はりま））2間であることがわかりました。

平成元年度の発掘調査　基壇中央で確認した礎石の据え付け穴のうち、1つは鎌倉時代頃のものであることがわかりました。また、南大門を建築する際の作業足場穴（あしばあな）とみられる小柱穴が見つかりました。小柱穴は、礎石の据え付け穴1つに対して、囲むように4つあり、各々は東西9尺（2.7m）、南北8尺（2.4m）の間隔で配置されていました。また、基壇築成土（ちくせいど）は、厚さ1.85m残っており、下部は厚さ0.3～0.4mの粘土で築き、上部は厚さ0.05～0.14mの単位で粘土や砂を突き固めて造られていました。



大安寺旧境内伽藍配置図



● 礎石据え付け穴　▲ 最下段の石に据えられた凝灰岩（耳石）の位置

■ 作業足場穴　▽ 最下段の石上面のほぞ穴の位置

＊昭和29年の発掘区と、主に基壇の南側で行った平成9年度の発掘区、平成10年度第1発掘区は省略しました。

南大門平面模式図と調査発掘区

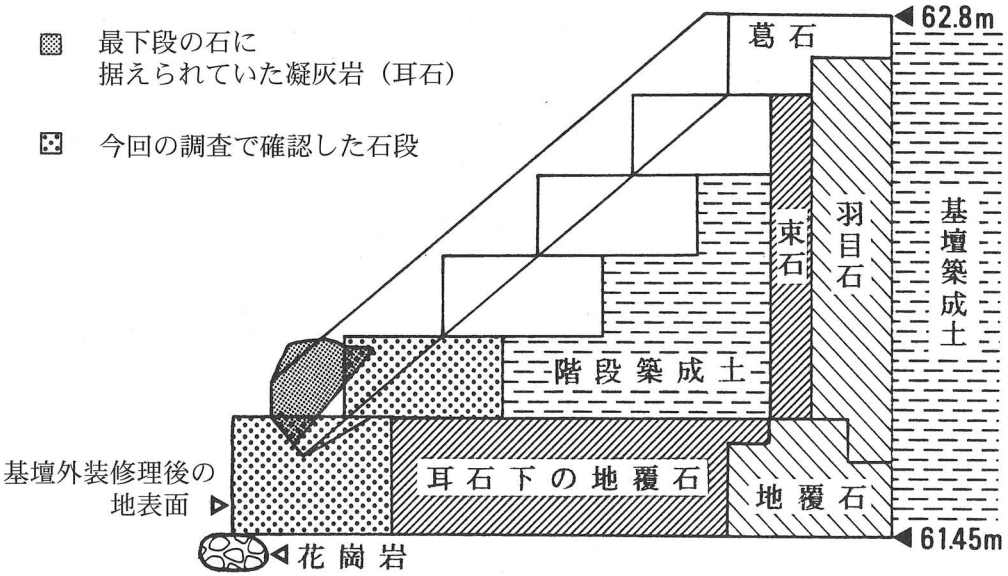
南大門の基壇外装　南大門の北階段は、昭和29年に東半部を確認しました。また、平成10年度に東端部を再確認し、凝灰岩の切石を用いた階段が部分的に残っていることと、その下に河原石を据えていることがわかりました。この河原石は、基壇外装を修理する際に、凝灰岩の延石に代わって用いたとする考え方（基壇外装修理説）と、本来、河原石は地覆石の下で地中に埋まり、地表面には見えないため、凝灰岩とともに創建時のものであるという考え方（基壇外装創建説）の2つがありました。ところが、平成11年度の基壇西端の調査で、同様の河原石が見つかりました。この河原石を据えた土の中に平安時代中頃の土器が入っていたため、基壇外装修理説が有力になりました。

今回の北階段西半（平成12年度第1発掘区）の調査でも、東半部と同様、凝灰岩の階段下に河原石を置いていました。そして、ここでも河原石を据えた土から平安時代中頃の土器が出土しました。したがって、これらの河原石は、平安時代中頃以降に据えられ、河原石上の凝灰岩もその頃、あるいはそれ以降に据え替えられたことがはっきりしました。

階段の復元　石段は下から2段目までが部分的に残っていました。1段目の石は、高さ0.3m、奥行0.42m、幅1.8～1.9m、2段目の石は、高さ0.21m、奥行0.42m、幅1.7～1.8mです。0.12m分が重ねて積まれ、踏面は0.3mです。また、北階段の基壇端からの出は、約1.3mでした。

大安寺本堂北側軒下で保管されている凝灰岩切石が2つあります。いずれもどの基壇で使用されていたものかよくわかりませんが、南大門基壇の羽目石および地覆石と、形状・寸法が合うことがわかりました。そこで、これまでの成果をもとに北階段と基壇の高さの復元を試みました。調査では、下から3段目以上の石と葛石の高さはわかりませんでしたので、仮に、葛石の前面を地覆石の前面に揃え、下から3段目以上の石の高さと奥行き、および葛石の高さを下から2段目の石と同寸法で考えました。その結果、下から3段目以上の石の高さは各々約0.21m、石段の数は葛石を含めて6段、地覆石底面から葛石上面までは高さ1.35m、基壇上面は標高62.8mに復元できました。

階段の附属施設　最下段の石の上面には、長辺0.35m、短辺0.25m、深さ0.15m位のほぞ穴がありました。ほぞ穴は南大門の柱通りに1つ、その中間に2つ（1対）あり、2.5～2.6m（8.5尺）間隔で配置されています。西から3つ目の柱通りのほぞ穴に凝灰岩が据えられていました。この凝灰岩は幅0.65mで、耳石の一部と考えられます。耳石は、通常、階段両端とその間の柱通りを区画するものですが、今回見つかった耳石は、柱間中央にも配置される極めて稀な例といえます。



階段の構造（断面模式図）

大安寺・南大門跡から出土した天平の仏像

史跡大安寺旧境内　奈良市大安寺二丁目

史跡大安寺旧境内南大門地区の保存整備事業に関わる発掘調査で、塑像（仏像）が破片で30点あまり出土しました。すべて南大門の北階段を覆う堆積土から出土しました。

塑像はすべてが火災等で焼けていましたが、製作技法や形態的な特徴を観察できるものが3点ありました。現存する奈良時代の塑像と比較したところ、共通する点が多いことなどから、奈良時代に作られたものと判断しました。

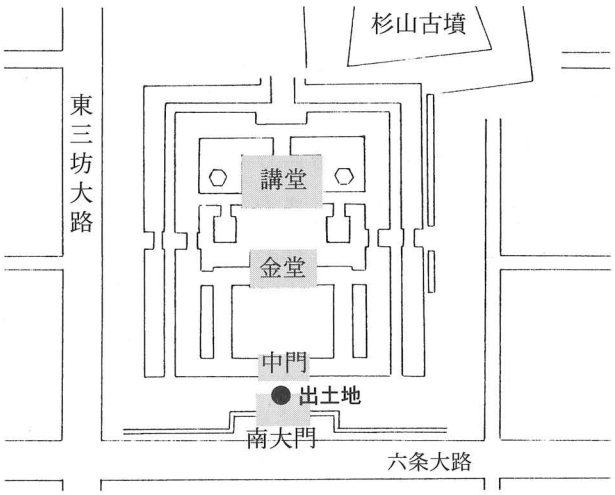
記録に残っていた大安寺の塑像　大安寺には、大安寺の縁起と財産目録をまとめた『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』（以下、『資財帳』）が残っています。これは、天平19年（747）に収録したもので、以下のような記載があります。

「　攝四天王像二具在南中門
　　右天平十四年歳次壬午寺奉造　」

「攝（しょう）」とは塑像を指し、天平14年（742）に製作された塑造の四天王像二具（2組）が、「南中門」に安置されていたという内容です。大安寺に現存する塑像はありませんので、当時の大安寺に所在した塑像について知ることのできる貴重な記録です。

それでは、「南中門」とはどの門を指すのでしょうか。『資財帳』には「南中門」の他、「南大門」、「中門」と3つの門の名称が記されていますが、それぞれ門の位置に関する記載はありません。現在までに発掘調査で確認している門は、金堂の南にある門2つのみで、位置関係から南大門、中門にあてられています。このうちのいずれかが、『資財帳』に記されている「南中門」にあたるという説があります。

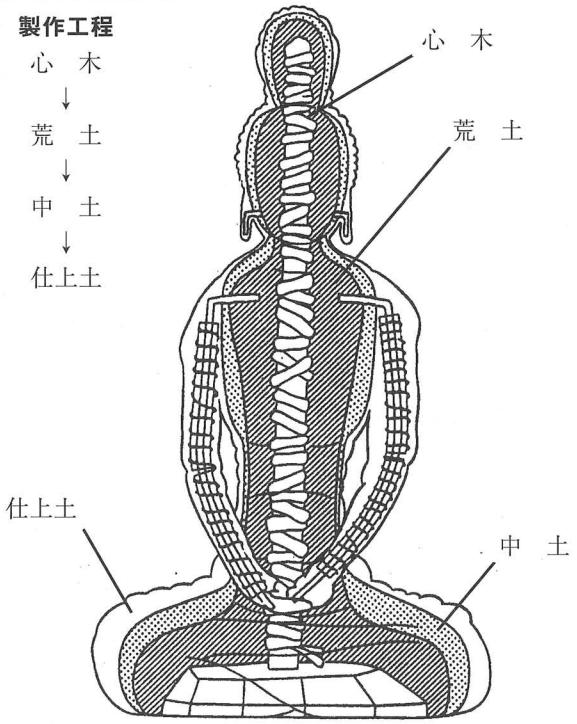
以上のことから、現在の南大門あるいは中門が当時の南中門であるならば、出土した塑像は、『資財帳』に記されている四天王像そのものではないでしょうか。



大安寺の主要伽藍と塑像の出土地

塑像とは？　粘土で作った像で、奈良時代に流行しました。その製作工程は、まず、木で「心木」を作り、心木に縄を巻き付けて、内から「荒土」、「中土」を順番に重ね、最後に「仕上土」で仕上げます。

材質で分類すると、仏像には、他に木像、乾漆像、銅像などがあります。



塑像の断面と製作工程
（『日本の美術第255号　塑像』至文堂、1987より抜粋、改変）

塑像A（四天王像の腕部） 長辺約16㎝、短辺約12㎝、厚さ約5㎝、重さ約760gあります。塑像の製作技法の特徴である荒土、中土、仕上土の3層が残っており、荒土にはスサと呼ばれる藁や直径1～5㎜位の小石が大量に含まれています。中土には、荒土よりも細かいスサや小石が若干入っていますが、仕上土にはきめの細かい粘土を使っています。表面の緩やかなカーブや皺の表現から、衣服の一部と思われます。また、荒土の成形の仕方から、腕や足を意識して作られていることがわかります。

ところで、現存する奈良時代の四天王像は、甲冑をつけた武装の姿で足の下に邪鬼などを踏んでいます。甲冑の下には上衣を着ており、肩から肘までは甲冑に覆われて下の上衣は見えません。しかし、上衣が露出している肘から手首にかけての様子は、塑像Aの表面の緩やかなカーブや皺の表現とよく似ており、塑像Aは四天王像の腕部と考えてよいと思われます。その大きさからみて等身大と想定できます。なお、如来像や菩薩像は、衲衣や天衣と呼ばれる衣をまとっており、四天王像のように上衣を着ることはないようです。

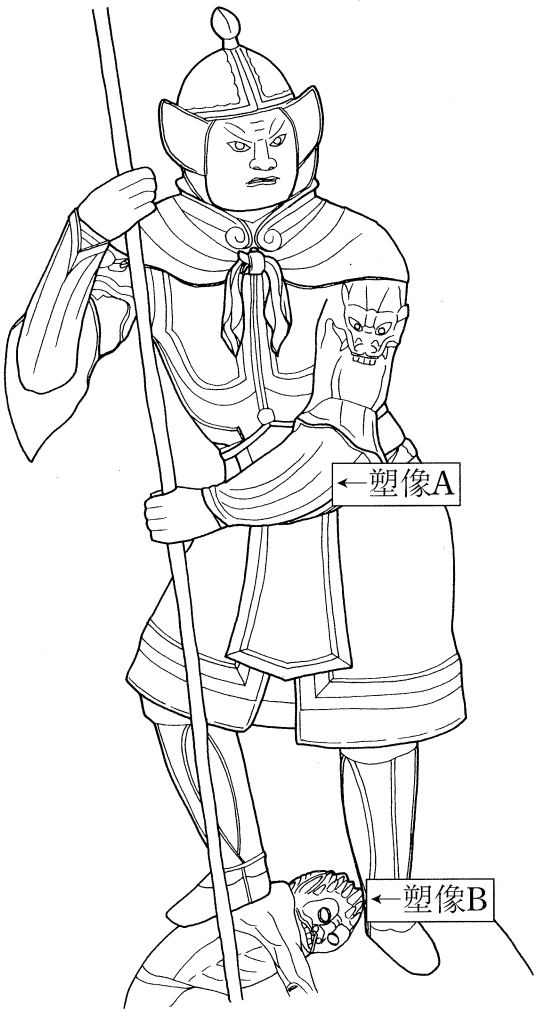
塑像B（邪鬼の頭部） 破片2点が接合した個体で、長辺約17㎝、短辺約8㎝、厚さ約7㎝、重さ約620gあります。仕上土と中土しか残っておらず、荒土は剥がれ落ちたようです。

表面には、頭髪の特徴が幾つもあります。畝のような凹凸が5本以上並んでおり、髪の毛を束ねた状態を表しているようです。1束ごとに線で髪の毛を描き、束ねた毛先は縮毛になっています。ヘラや細い棒状の道具で突き刺したり、押しあてており、一般に四天王が踏んでいる邪鬼に多い技法です。これらのことから、邪鬼の頭髪の一部と思われます。

塑像の色彩 塑像Aの表面の一部には、赤と黒の色彩があり、黒の上に赤を塗り重ねた箇所もあります。蛍光X線分析で成分分析をした結果、赤はベンガラ（酸化第二鉄からなる赤色顔料）であることがわかりました。黒の色彩については、分析できませんでしたが、漆の可能性があります。また、塑像Bの頭髪の表面にも、塑像Aと同様にベンガラが塗られていたようで、赤い彩色がわずかに残っています。同時代の塑像の例からみて、大安寺で出土した塑像も、赤（あるいは黒も）だけでなく、数色に彩られた、色彩豊かな塑像であった可能性があります。

塑像は、他の材質の像と比べて、細部の表現が容易で製作費用が安く、材料も調達し易いといった長所がある反面、重くて壊れやすいという欠点もあります。さらに、土中に埋もれていたとなると、残り具合が悪くなることは言うまでもありません。大安寺で出土した塑像は、焼けたことによって一部が残ったものと思われます。

今まで『資財帳』の記載にとどまっていた奈良時代の塑像が、実際に発掘調査で出土したことは、大安寺の歴史を理解していく上で貴重な発見といえるでしょう。



出土した塑像の部位
（『奈良六大寺大観10』岩波書店、1968）
東大寺法華堂の増長天像（乾漆像）写真からトレース、改変

奈良市東部の複合遺跡(ふくごういせき)-縄紋から安土・桃山時代まで

水間(みま)遺跡　奈良市水間町

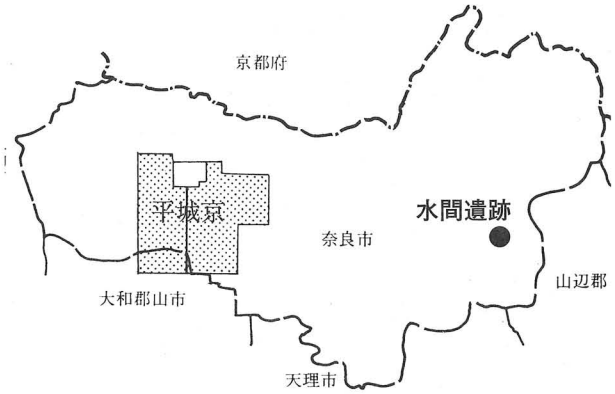
調査の概要　奈良市の東部、水間町には、弥生・古墳時代の遺物散布地があります。奈良時代以降は東大寺や新薬師寺の杣(そま)（木を採るための山）として利用され、中世には水間氏の支配地であったとされています。平成11・12年度に3回の調査を行ったところ、縄紋時代から安土桃山時代までの人々の生活の跡が多数見つかりました。

主なものとして、以下のような遺構があります。

微高地①	縄紋時代中期前葉（約5,000～4,700年前）の住居跡。
微高地②	縄紋時代早期後葉（約6,700年前）以前の土坑、弥生時代後期末の溝と土坑、平安時代後期の掘立柱建物、鎌倉時代前期の溝。
谷　①	飛鳥時代の護岸施設、鎌倉時代前期の祭祀遺構。
低地　①	古墳時代後期の溝。
丘陵　②	鎌倉～室町時代の火葬墓。
丘陵　③	平安時代中期から鎌倉時代の土坑・溝。
丘陵　⑤	弥生時代後期末の溝と土坑、鎌倉時代後半の土坑、室町時代前半の掘立柱建物と土坑、安土桃山時代末の埋甕と濠。特に、濠の存在は丘陵⑤がこの頃居館の一部であったことを窺(うかが)わせます。

これらのことから水間遺跡では、丘陵や微高地は縄紋時代から住居域として利用され、低地の一部は古墳時代後期にようやく開発されたことがわかります。平安時代末から鎌倉時代にかけて、谷や微高地・低地は、水田開発にともなう造成が行なわれており、住居域は丘陵の上に移っていったようです。

また、鎌倉～室町時代の火葬墓地や、安土桃山時代の居館からみて、有力者が存在し、水間の地を支配していたものと思われます。



水間遺跡の位置

調査地の地形と時代別の遺構分布　1/4,000

中世の火葬墓　水間町には、村の鎮守として東大寺の手向山八幡神を勧請した八幡神社がありますが、この神社の参道につづく丘陵②は「馬場崎」と呼ばれ、神社の祭祀場として馬を走らせる場でした。この丘陵②の先端部を調査したところ、鎌倉・室町時代の火葬墓と考えられる遺構が見つかりました。

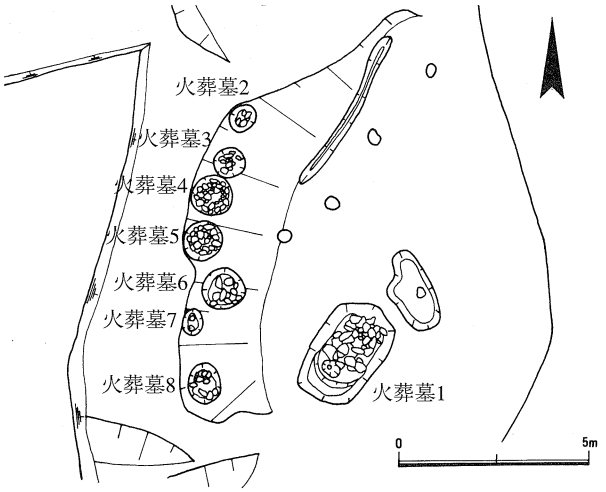
火葬墓とは、火葬骨を納めた墓のことで、仏教の影響で8世紀頃から日本でも営まれるようになったものです。水間遺跡では、8つの火葬墓を確認しました。

これらの墓は、丘陵の先端部を造成した平坦面と斜面とにそれぞれ造られていました。火葬墓1とそれ以外は、下表に示すように立地も形態も規模も異なっていましたが、いずれも積み石がみられました。

火葬墓1では、墓穴の中に黄色粘土を入れ、その上に石が積まれていました。また、火葬墓2～8では、墓穴をある程度埋めた上にほぼ同心円状に石が積まれたものがありました。火葬墓2～8は、斜面上に並んで作られていますが、隣り合っているものでも時期が大きく異なっています。

積み石には、付近で産出する花崗岩の礫を多数用いていますが、火を受けた痕跡のある礫が多く含まれています。これに対し、墓穴の壁面や底面には熱を受けた痕跡がありませんでしたので、火葬場で用いられた礫を埋葬施設まで運んできたのでしょう。

墓穴に石が積まれているのは、墓地で石を積む行為が、功徳を積み、死者の鎮魂を願うと共に自らの息災を願う行為とされているからと思われます。拾骨した骨は、骨蔵器が残っていないことから何らかの有機質の袋ないしは容器に入れて埋葬したのでしょう。これが年月を経て腐食し、上に積んでいた石が崩落したと考えられます。



火葬墓の配置　1/200

出土遺物は、土器以外にありませんが、火葬墓1では、石積みに空間を設けたり、土の上から穴が掘られており、ここに何らかの副葬品を埋納していた可能性もあります。しかし、追葬のための墓穴である可能性もあります。

奈良県宇陀地方の中世墓地の例（大王山遺跡）では、13世紀頃から在地の有力者によって火葬墓地が造営されるようになったようで、14世紀後半以降になると造墓者が広がり、新たに台頭した名主層が小規模墓地を多くつくるようになってきます。

水間遺跡の火葬墓は、13世紀後半～14世紀後半のきわめて小規模な墓地でありますが、その立地は鎮守社の祭祀場の先端であり、また背後に山を負い、平地の流水を臨むという風水思想に基づく選地であることから、この頃の水間町における極めて中心的な人物が埋葬されていたのかも知れません。中世に水間を支配していた水間氏が記録にあらわれるのは天文2年（1553）からであり、墓に葬られているのは、それ以前に水間を支配していた人物の可能性があります。

火葬墓の規模・形態・その他

	選地	墓穴の平面形	墓穴の規模		出土遺物	時　期
火葬墓1	平坦面	方形	2.8m×1.7m	深さ約0.3m	土師器皿	14世紀後半
火葬墓2	斜面	円形	直径約0.7m	深さ約0.3m		
火葬墓3	斜面	円形	直径約0.9m	深さ約0.6m		
火葬墓4	斜面	円形	直径約1.0m	深さ約0.7m	土師器羽釜	14世紀後半
火葬墓5	斜面	円形	直径約1.0m	深さ約0.8m	瓦器椀	13世紀後半
火葬墓6	斜面	円形	直径約1.3m	深さ約0.3m		
火葬墓7	斜面	円形	直径約0.9m	深さ約0.3m		
火葬墓8	斜面	円形	直径約1.1m	深さ約0.3m		

水間（みま）の古墳と総柱（そうばしら）建物群

水間遺跡　水間町

奈良市では、3年前から県営ほ場整備事業田原東地区に伴う発掘調査を6次にわたって実施してきました。今回の調査では、A～Cの3箇所に発掘区を設定して行なっています。このうちA・C発掘区から多くの遺構が発見されています。以下にそれぞれの概要について説明いたします。

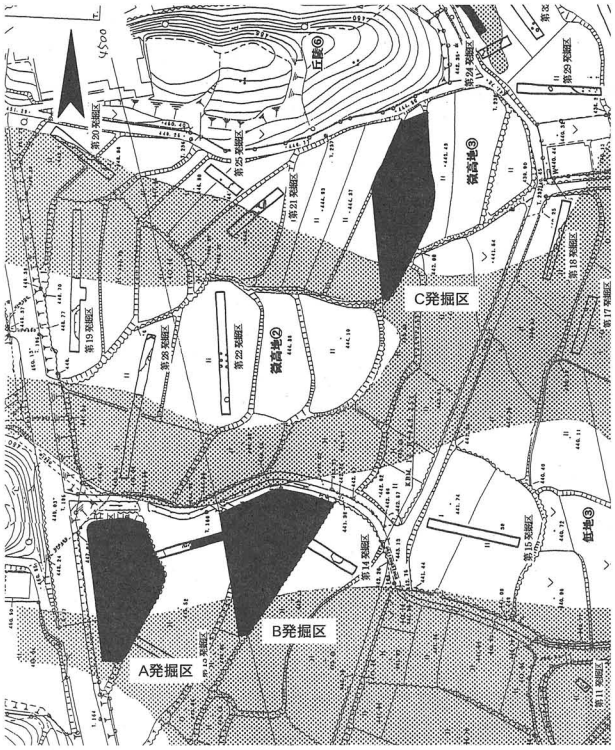
A発掘区　国道369号線の東側に設けた発掘区です。その位置は、西から延びる丘陵の先端部付近になります。A発掘区から古墳2基、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物6棟、掘立柱塀1条などを検出しました。

古墳は2基あり、周溝のめぐる発掘区東側の古墳を1号墳、周溝のない西側の古墳を2号墳と仮称しておきます。古墳の墳丘は、飛鳥～奈良時代に壊されて残っていません。古墳が築かれた時期は、出土した遺物から、5世紀（400年代）の終わり頃と考えられます。

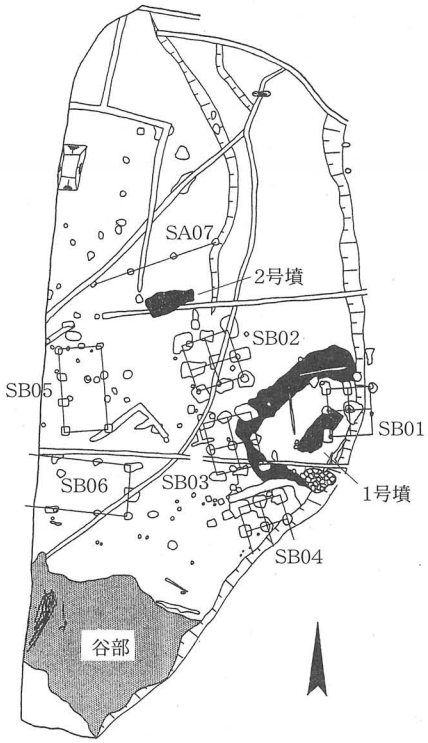
1号墳は、幅1.5mの周溝が方形にめぐっているので、一辺約7mの方形墳であったことがわかります。この中央には、割竹形木棺を埋納した墓坑がありました。割竹形木棺というのは、丸太を刳り貫いて作られた断面が丸い形の棺で、古墳時代によく使われました。棺の中には、鉄刀子、ガラス玉などが副葬されていました。南西側に頭を向けた女性が葬られていた可能性があります。周溝の北東隅には、土師器壺、須恵器壺・𤮔（はそう）が置かれていました。

2号墳は、周溝が残っていませんので、本来の古墳の大きさはわかりません。割竹形木棺を埋納した墓坑が残っていたので、ここに古墳があったことがわかりました。棺の中には、鉄剣、鉄鏃、鉄斧などの鉄製武器や農工具が副葬されていました。西側に頭を向けた男性が葬られていた可能性があります。

飛鳥時代から奈良時代の遺構は、掘立柱建物6棟、掘立柱塀1条を確認しましたが、全部が同時期に建っていたわけではなさそうです。建物の方



発掘区位置図　1/2,500



A発掘区平面図　1/500

向や柱穴の遺物などから、大きく2時期の建物にわかれます。

飛鳥～奈良時代前半の建物は、方向が北で西へ振れている建物群で、2間×2間規模の総柱建物（SB02・SB03・SB04）が南北に3棟並んでいました。この北側には東西方向の掘立柱塀（SA07）があります。

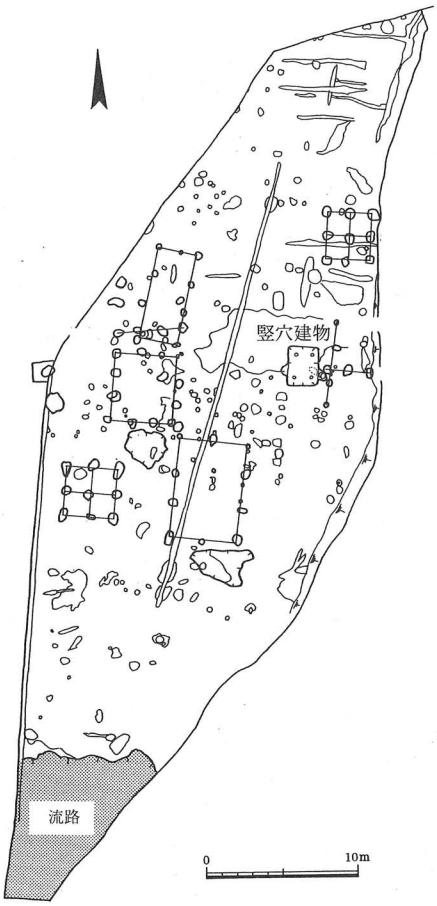
奈良時代後半の建物は、方向がほぼ南北を向く建物群で、東側に2間×2間規模の総柱建物（SB01）、西側に2間×3間規模の南北棟建物（SB05）、2間×2間以上の東西棟建物（SB06）が建っていました。

他に、南側の谷部から多量の木屑や木製品の未製品、下駄などが出土しました。飛鳥時代の土器が多いものの、上層からは奈良時代後半の土器が出土しています。

B発掘区　A発掘区より東側へ2枚下がった水田に位置します。発掘区内は水田造成時に大きく削平されており、遺構の残りはあまりよくありません。縄文時代の土坑、弥生時代の溝、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物1棟などを確認しています。

C発掘区　B発掘区の北側に位置します。発掘区の南側に小さな谷があり、流路となっていました。ここからは、古墳時代から平安時代の遺物が出土しています，流路の北側が小高くなっており、ここから奈良時代の掘立柱建物5棟、掘立柱塀3条、竪穴建物1棟などが見つかっています。A発掘区の掘立柱建物と比べると、小規模な建物が多いようです。竪穴建物は、南北2.5m×東西1.9mの方形竪穴内に四本の柱を立てる構造です。柱間は、南北1.65m、東西1.1mです。東壁南側にカマドを造り付け、土器を3段に積み重ねた煙出しが取り付いています。床面に敷き詰めた粘土層が3面あり、改修を2回行っていることが判明しました。人が居住するには建物内が狭いので、煮炊き専用の釜屋であった可能性が考えられます。このような遺構は、関東地方以北などで発見されることが多く、奈良県では非常に珍しい調査例です。

まとめ　A発掘区で発見された飛鳥から奈良時代の掘立柱建物は、平城京跡などで確認される建物と同等の規模があり、倉庫と考えられる総柱建物群が南北に並ぶなどの規則的な配置が認められます。このような建物群は、この辺りの一般的な住居跡とは考えられません。むしろ、C発掘区の建物群を一般的な住居跡と考えた方がよいでしょう。文献によれば、水間は古くから杣（そま）であったことが知られています。杣では、山林の木材を伐採し、加工して搬出する仕事を主にしていました。A発端区南側の谷部から出土した多量の木屑（手斧の削り屑）や木製品の未製品などは、そこで実際に木材生産、加工が行われていた証拠です。木材は貴重な資材として管理されており、杣にはそのための役所（山作所）が置かれていました。A発掘区で見つかった建物群は、この役所に関連した施設である可能性が推測されます。また、古墳の存在が確認できたのも大きな成果です。今まで水間町は、古墳の空白地でしたが、その認識を大きく変える発見となりました。1号墳、2号墳には、水間を代表するような有力者が埋葬されていたと考えられます。



C発掘区平面図　1／500

奈良市埋蔵文化財発掘調査の歩みⅠ
－速報展示リーフレット集－
（平成11～14年度）

平成17（2005）年3月31日発行

編 集　奈良市埋蔵文化財調査センター
発 行　奈 良 市 教 育 委 員 会
印 刷　共同精版印刷株式会社